血清と漢藥を併用すれば全經過は五六日にて足り、十日に及ぶものは稀れであつて、漢方が血清と相ひまつて、漢方專門や洋方一方よりも效果をあげるのである。この點は漢方醫も知り、今日の漢方醫中にヂフテリアの治療に血清を用ひぬ者はない。ことに愉快なるはこの漢方に優れる三法ともに、日本人の手によつて最上點に達成せられた事である。卽ちヂフテリアは北里氏により、ヱメチンは田代豐吉郎氏により、種痘は梅野信吉氏によつてである。然もこの中の一人たる田代氏は漢方復活運動の中堅人物たるに至つては、予は微笑なき能はぬものがある。

かく今日の漢方醫の殆んど全部は打診聽診を採用し、洋方の血清中の的確なる物を取り入れつつあるに、今日の洋方醫の殆んど全部は、却つて漢方の良點をも笑はんとしてゐる。——それ好學の精神より見て、眞理追求の道念に於ていづれが忠實な者であり、いづれが進步的精神を有するか、之によつても察す

べきではないか。舊弊たるべき漢方醫家に他の長所を採用する者多く、進步的たるべき洋方醫家が、却つて他の長所を見るの明なきに至つては、錯誤も甚だしいものでないか。

漢方でも治せぬ疾病

漢方がイクラ洋方に較べて優秀な醫學だからと云つて、自ら程度があり、神の妙技と技を競ふ譯にはゆかぬ。人力に限りある限り、漢方にも限りがあるがヂフテリアを除き、漢方の治せぬものは洋方もまた治せぬ處である。

然らば漢方を以てして治し得ぬ疾病は何かと云ふに、第一に癌腫であらう。之は手術によるの外なく、手術の效果も疑はれてゐる。癌腫に對する手術は洋方の特技でなく、洋方醫學の幼稚を笑ひをりし華岡東洋の旣に行つた處で、この手術また漢方の一分野である。癌腫に對する治療は、洋漢醫術の共に及ばぬ處と知るべきである。

腸の捻轉は、どうしても內服藥では治する事が出來ず、これは洋方の手術によるの外はない。この治療に就ては洋方はまさしく漢方に優れてゐる。

腸結核や肺結核の極度の末期も、既に手遲れであつて、如何とも策の施し樣がない。——然し二期までの中なら漢方で全く治すことが出來、洋方は初期すら手のつけ樣のないのとは程度が異つてゐる。

心臟病に就ては、洋方が全然治術と方劑を缺くに反し、自家中毒患者の心臟肥大、卽ち脚氣、糖尿、腎臟病、飲酒過大による心臟肥大はもとより、心臟瓣膜病で心臟の肥大した物さへ、よく漢藥にて縮小治療し得て、一代の役に立たしむることが出來るが、但し極度の心臟病で、全身が毬の如く腫れあがつてゐるものは手のつけ樣がなく、腦膜炎の猛烈なものまた然りである。

先づこれだけが今日の漢方で匙を投げねばならぬ物で、洋方醫術に比して如何に絕望病が少ないかは、之によつても察することが出來やう。——洋方では

治し得る病氣が稀有であるに反し、漢方では治し得ぬ病氣が稀有である。漢方はドコが迂遠であり、ドコが姑息であるか、洋方こそ迂遠姑息ではないか。

第五章　諸種の治療實例

脊髓炎の療法と治療

脊髓に發する疾病が澤山あるが、脊髓炎はその半を占めてゐる。而して洋方の治療では、沃剝を除いては他に藥物がない樣で、然もこの沃剝たるや、頗る效果の疑はしいものである。故に某公立病院の如きは、適方なき旨を諭して、敢て投藥せぬ處すらあり、また投藥をしても容易に治癒しない。それで洋方では藥劑よりも、電氣だとか水浴だとかの物理療法をなしたり、或は滋養物主義によつて身體を安靜にするを目的としてゐる。——これ洋方の藥物が物理療法及び安靜よりも以下だと云ふ事を意味してゐるのではないか。卽ち治療の方法

が全くないと云ふ結論に外ならぬ。

之に反し漢方では、器物の如き外的援助を全く借らずに、直に病原を襲擊して、その根本を平げ、能く奇功を奏し得るのである。

京都に新妻莊五郎氏といふ漢方醫がある。漢方古方の大家村井琴浦の門を出て古方を研究し、後淺田宗伯氏の門に學んだ人である、氏に面白き『腰髓炎』の治驗例がある。

一婦人年四十、嘗て腰部疼痛を患ひ、或醫者の診療によつて一旦治つたが、一年半後に疼痛が再發し、加ふるに兩下肢に痲痺を覺えた。そこで某府立病院で診療を求めたところ、院長が診察して、腰髓炎であると云ひ、大に電氣療法を稱場して、身體の安靜を主とし、專ら滋養物を用ひ、藥方による治療を全く度外視してゐる樣であつた。

何分にも院長樣の云はるる事であるからとて、その言葉の通りにし、治療を

受ること數十日に涉つたが、治るどころか痲痺がます〳〵增進し、腰から下がしびれて立つ事が出來なくなつてしまつた。そこで病院に見限りをつけて新妻氏の處へ來たのである。氏は之を診るに兩下肢の知覺が脫失し、腱反射が消失し、下腿の筋肉少しく萎縮し、大小便ともに自然に流出するけれども、分らぬ有樣であつた。——新妻氏は之を見て、若し藥を一ヶ月飲んで見て、下肢の指が左右ドチラか、幾分でも動くならば全治するであらうし、若し動かぬならば不治の病であると云ふた。家人は服藥を乞ひ、更に電氣療法を併用すべきや否やを問うたが、氏は之を無用として廢せしめた。

かくて氏は祕方集驗症方加附子を與ること二十日にして、二三指が稍々屈伸し、四旬にして兩膝關節も屈曲伸展が殆んど意の如くなり、大小便に對する感覺も出て、自失せざるに至り、六十日にして起坐步行が自由となり、自ら氏の家に來て禮をのべ、百日にして全治し休藥した。

木村博昭氏は淺田門下の俊秀である。氏も亦脊髓炎の治療實驗例を持つてゐる。

二十六歳の男子があつた。二月の初旬に俄然頭痛し、惡寒戰慄し續て軀幹と四肢に疼痛を發した。そこで卽日醫を迎へると、其醫師は之を感冒として解熱療法を施すこと四五日に至つたが治せぬ。そこで他醫に轉ずるとリウマチスと云ひ、之を療すること半月、發熱は全く止み、疼痛も輕減したが、痲痺が更に加はるので、更に醫を變へたところ、神經痛なりと云ひ、服藥四五十日、疼痛また起り、痲痺も甚だしくなつた。そこで五月の初旬に至つて又別の醫に診を乞ふと脚氣なりとし、其治療に從ふこと二週間、遂に兩足がしびれて力なく立つ事が出來なくなつた。そこで六月中旬、木村氏の門を叩いた。診察室へ入るにも人の脊を借つて來た。よつて之を診るに、兩足が全くしびれて動搖屈伸し得ず、腱反射消失し下肢の皮膚知覺亢進し、上腿筋肉は萎縮してゐない。症狀

が脚氣の如く、脊髓炎に類似してゐるが、極寒中に突然寒熱疼痛を以て發し、皮膚の知覺亢進の如きは脚氣になき處と脊椎を壓診するに二三の椎骨に疼痛するところがあり、よつて四物湯加龜板石決明を與ふること九日にして痲痺が大に去り、腕にて匍うて診室に來り得る樣になり。二週間にて杖にて歩行し、三週間を經て徒歩し得、三ヶ月餘にして全治休藥したとの事である。

膝關節炎、脛骨骨膜炎の治例

工藤直之助氏は淺田門下の逸足であるが、氏は學就り業遂げしも門戸を開かず、尙ほ師門にあつて、栗園先生の嗣子栖園に事へてゐた人である。而して栖園先生が死せらるるに臨み遺言して、吾兒なほ幼にして前途頗る遠し、君我が後を繼承して、兒の成業に及べと云はれたるを守り、十年一日の如く師の嗣子に仕へて今日に至つてゐる人である。氏に膝關節炎の治療例がある。

男子三十六、一日突然惡寒熱を覺て、一兩日にして右の膝關節が腫れあがり、

疼痛を發した。某醫が之を診て急性膝關節炎であるとて、之を治療すること四五日に及んだが、ただに效果がないばかりでなく、疼痛は外股に派及し、腫脹し膝頭は六七歳の子供の頭の樣で、寸分も屈伸することが出來ず、もちろん歩行は全く不能であつた。それで某醫學士に治療を乞うたが、二三週間を經ても寸效なく、更に二三轉醫したが病が進むばかりである。

而して醫師は曰く、もはや手術に依らねば治することが出來ぬと。而して全身は大に疲勞衰弱して、飲食が更に進まず大便は祕結し、體溫が初め四十度に達し、どうしても平溫に下らない、毎夜少しく盜汗が出て、臥床すること半年になり工藤氏の事を傳へ聞いて診を乞ふた。

氏は之を一診して、これ頗る難症である。然し手術には及ばぬ、藥で十分に治し得るとて桂芍知母湯に牛黄丸を兼ね與へ、冷却を廢して却つて局部には當歸蒸加荷葉礬石を以て蒸熨法を加へ、之を療すること十餘日、疼痛大に輕減し

たが、腫れ工合は更に大きくなつて、あだかも氷袋の樣になつた。そこで氏は、發泡膏を貼つて先づ稀汁を漏出せしめ、後に前衝膏を以て之に代へ、內服藥も外服藥も、同じ物を續けてゐると、數十日にして稀水も止み、關節の腫脹も減じ、疼痛全く止み關節の運動が殆んど意の如くなり、三ケ月にして全治したとの事である。

次に脛骨々膜炎の治療例を木村博昭氏から聞いた。

五十九歳の農婦が、突然に左下肢の脛骨々膜炎に罹り、某醫の治療により二回の手術を受けて治したが、三年の後またもや同じ局部に疼痛を覺え、且つ腫れあがつて殆んど歩行することが出來ぬ、それで甲乙丙丁戊と轉々して診察を求めたが、いづれも手術を說かぬ者はない。然し先に二度の手術でコリてゐるので、たとへまた手術を行つても、更に再發するであらうとて手術を受けず、最後に木村氏の門を叩いた。

氏は招かれて往診するに、左の下肢、特に膝關節以下が大に腫脹し、脛骨上三分の一の所が軟骨狀の硬度を以て殊更に隆起し、その中央に針の穴ほどの漏口があつて稀膿を排出し疼痛が甚だしくて、晝夜殆んど眠ることが出來ず、左下肢は少しも屈伸動搖することが出來ず、體溫三十八度五六分である。腹部を診るに硬滿で、下腹部に壓痛を覺え、食慾進まず大便が祕結してゐる。

氏は之を見て手術を要せぬ、骨膜炎には相違ないが第一に腹が惡い。故に腹を主として治療に從へば、骨膜炎も根治するであらう。若し手術の如く局部のみを治せば、再三再四發を免がれぬであらうとて、騰龍湯を飲ましめ、漏口とその周圍の鬱熱を去るために中黃膏を貼つた。

かくすること一週間にして、疼痛大に輕減し、前處方を連用し、下腹部が大に柔かになり、二十五六日にて杖にて室內を步行し得る樣になり、四十五日にして門外に出で、八十五六日にして漏口が癒着し腫脹全く去り、百二三十日に

して休藥し、今日まで再發せず健全であると云ふ。——實に骨膜炎を腹候によつて治するが如きは、洋方醫から見れば奇想天外の奇術の如きではないか。然も豫定通りに治するところ、病理にかなつてゐる證據ではないか。

脫疽病の治療實例

脫疽症の如きも、全く手術切斷を要せぬものである。脫疽症の非切斷治療の如きは、素人にだつて明かなほど漢方が優れてゐるものである。

嘗て淺田宗伯の門に三十四五歲の男子が來つて來診を乞うた。右足が脫疽症に罹つて、顏色憔悴し苦悶の狀に堪へざる物の如く、其局部を檢するに五指は勿論、足跗の五分ノ二は既に腐蝕し、五指は皆脫落し、跗骨はみな黑炭の如く足跗關節に至るまで、紫赤或は紫黑色を呈し、右下肢の膝關節以下は甚だしく腫脹し、晝夜疼痛が劇烈であつて、時々寒熱の發作があり、更に飲食を欲せず益々衰弱に赴くばかりである。玆に於て上京し有名なる大醫に就て診察を求め

たが異口同音に膝關節、或は大腿の中央より切斷せねばならぬ。若し切斷せぬ時は死に到ると云うたのである。

然しその男は斷じて手術を望まず、一足を失ひて生きんよりは死を求むるのみと、遂に念のために、姑息なる漢方醫として輕蔑せる、淺田氏の門を試みに訪うたのである。

淺田翁はこれを診て切斷の必要はない、服藥をなさば病毒を驅逐して、足跗の幾分を保存する事を得べしと云ひ、內服藥を以て專ら其病根を芟夷し、膏藥を貼つて其腐肉の排除に勉めた。かくして之を療すること四週日ばかりにて腐蝕部は殆んど脫落したが、尙ほ腐骨が附着してをり、之も二週間にて離脫し其後に精肉が勃起し、腫脹は減退し、疼痛自ら止み遂に全治し、宗伯翁の言の如く、殆んど足跗の半を殘し、杖によらずして徒步する事を得る樣になつたのである。

木村博昭氏にも脫疽の治例がある。明治四十一年三月、二十五歲ばかりの男子が來て曰く、昨年の十月頃より右足冷却を覺え、漸次左足に比して羸脫し、四十一年一月に至り、その母指頭が劇痛を發し晝夜一睡もせざること數日、某醫之を診て、或は裏部が化膿せるならんと指頭を切解して見たが更に膿がなく爾來疼痛が益々加つて、遂に切斷口より漸く黑色を呈し、續て腐蝕し始め脫疽狀を呈したので、同醫の指名を以て某病院の某博士に診斷を乞うた。博士は足跗關節から切斷するに非ざれば治せぬと云ふた。そこで木村氏を訪うたのだと云うた。

氏は之を診るに身體は瘦せ、體溫は普通以下で、脈搏は八十內外を算し、其性質は小にして弱であり、右足特に下腿が冷却甚だしく、局部より足關節に至るまで腫脹して紫赤色を帶び、特に母指の周圍は紫黑色を呈し、母指頭は切解後腐蝕して五分ノ二は脫落して、黑色の指骨が現はれ、疼痛が絕ゆることなく

他の四指と踝上に波及して、時々大劇痛を發すると云ふのである。

氏は之を診て、切斷などは無用である。切斷せば再び接續することが出來ぬ予の藥を飲めば或は指の全部を失ふかも知れぬが、切斷には及ばず、經過が良ければ四指は云ふに及ばず、母指も一節は殘るであらうと之に投藥すること半年にして十中八九癒え、更に半年餘にして母指の半を殘して全治し、綿を其の處に入れてはけば足袋もはけて尋常に見え、草履も下駄すらも履ける樣になつたとの事である。名優、澤村田之助の如きは、漢方醫にかかつてゐたら、あの無殘な死方をしなくてもよかつたのである。

腸チブスの治例

埼玉縣の川越に餘生を靜かに送らるる安部大藏氏が或富豪の腸チブスの難症を治した。その症を摘記すれば、熱度三十九度を往來し昏睡狀態にあること若干日、腹部が膨滿し、大便が祕結し、眼目口吻さらに動搖せず、口が渴すること甚だしきが、自ら湯水を欲しいと云へない、で藥や水を齒間に注ぐときは飲み下すのみである。——この治療に從事したのは博士が一人、學士が三人、しかも益々危險の症に陷り、遂に死を斷じて明日の午前九時だと云ふた。

茲に於て家族等が相議して、洋方の名醫の手を盡したが、たうとう此樣になつた。どうせ助らぬのだから、心殘りのない樣に漢方醫にも掛けて見やう、死んでも憾みに思ふまいとて安部氏に診察を乞うた。氏は一診して實に危篤であつて死生一髮の間にある。若し一日遲れたらダメであつた。予よく之を治せんと投藥すること三日、少しく眼目を開き、口を動かし、一週間にして自ら渴を覺え、漸く粥汁を攝取し、間もなく全快してしまつた。

先年物故せられた和田啓十郎氏も腸チブス末期に於ける腸出血を治療した。日本橋區松島町堀口氏妻三十七歳が、三月の初旬に腸チブスに罹り、二名の醫家並びに某病院長が合議して治療に當つたが五月七日卽ち發病後五十三日に及

んで俄然腸出血を來し、體溫暴落し人事を省せず、大小便を自失し吃逆が止まなかつた。三醫が集まるが策の施しやうがなく、患家は大に狼狽して死を諦めたが、たまたま和田氏をすすめる者があつて氏を迎へた。

氏が往診するに、氷枕及氷嚢を合して六個をあて、體や顏は瘠せ衰へて骨が現はれ、眼窩が陷沒して血色なく、舌面は刮白で凸凹不平で、白苔を衣して唇舌ともに乾燥し、肺には共にラッセルを聞くも、打診に著しい變化はなく、咳嗽が頻發し、腹部は陷沒して舟の底の如く拘攣が甚だしくて、下腹に至りては稍々力あるを認めた體溫は四十度二分、高き時は四十度六分に達し、吃逆止まざること三日である。諸症は危篤なるが脈は浮緊にして幸に脫力して居らぬ。

そこで氏は家人に向つて、病勢が陰位に陷つてゐるから、盡く氷嚢や氷枕を去り、食物でも藥でも熱い物でなければ入れてはイカぬ。かくして服藥を怠るなくば幸に治せん、若し治を忽かにせば再度の出血を見て、其時は死期であら

う。若し予の手段によつて治を施し悔ゆるなくんば治療せんと云ふた。

家人は他の醫者がトラモ治らぬと云うたのを聞いてゐるし、和田氏の治療は從來の醫者の正反對な治療なので、萬一を諦めて氏に就いた。氏は黃土湯一方を投じたが、其夜は最高熱度が四十度に止り、毎日四分づつ熱が下り、七八日にて平溫に達し五十餘日にて全快した。之を見て他の醫者は、自ら匙を投じてゐながら、後になつて病人の治期が來たからだと負け惜みを云うたとの事であつた。——腸チブスの治例は此外にイクラでもある。

膽囊結石と肪眺結石の治療例

此處にのぶる二例は、共に和田啓十郎氏の治療例である。

ドイツ大使館の厨夫の妻某五十餘歳。七年以來膽石疝痛を患うて居り、月々二三回は必ず發し、發すれば心窩部が疼痛して、痛みが右側の肩背に徹り、水穀嘔逆して食藥共に口にして入るる事能はずと。聖ルカ病院其他の諸醫に就て

治を受けるが、僅かに一時の小康を得るのみであつた。而してその起るや時と處を選ばぬので、近傍の用事と雖も安んじて足すことが出來ないのであつた。

その娘が和田氏の病家に女中をしており母を伴うて來た。氏之を診る數日前に發作した後で間歇時であり、著しき徴候を認め難かつたが、ただ右脇下がやや膨脹し、心窩が痞鞕攣急で腹力が少しく軟弱なるのみである。而して膽囊結石たる事は毎發作毎に起る時に排泄した糞便中から滌出して確證がある。そこで氏は必ず根治すべきを云ひ、服藥百日を命じ茯苓飲加半夏湯を主方とし、承氣丸を兼用せしめた。

然るに服藥が二回で疝痛が起り、病者は恐れて服藥を止めた。娘は大に驚いて氏を訪ね、彼の藥は腹痛を喚起すべき性質のものなるかと詰つたが、氏は發作後數日を經てゐるから、恐らく再び結石を生じてゐるのであらう、疼痛が起るのは、それを脱出せしめんがためであつて、大に悦ぶべき徴候である。故に

若し腹痛を恐れて服藥を止めたならば、更に結石を生ずるであらう、若し結石が生じて後、再びかの藥を用ふるならばまた腹痛を反覆するであらう、結石が既に脱出したから、今度は再び腹痛がないであらうと云うた。娘は之を歸り報じ、病者は早速服藥を繼續し、遂に再び疝痛が起らず百日にて全快し後、數年を經たるも再び同病が起らぬと。

膀胱結石（石淋）の如きは西洋流では器械的碎石術を施し、能はざる者は肪胱切開術を以て之を摘出するのであり、單に對症的で根本的治法でないので、再度の結石には再度の手術を要し、再三再四この手術を反覆して、遂に病者を死に至らしめることが常である。

然るに漢方には容易に、その石を溶かして流出せしめ、再び結石が出來ぬ療法があり、木村博昭氏は頗る澤山にこの治例をもつてをられるが、左に述べるは和田氏の例である。

本所區魚屋某の妻が肪胱痙攣を發して治を氏に求めた。氏は之を診て、結石性なることを診斷し、既往症を問ふに、かつて肪胱結石を患ひ、大學病院で切開摘出術を受け、鳩卵大の結石を出したと云ふ事を知つた。そこで氏は再び結石が起り、ために肪胱痙攣を發したものである事を說明し、其治方を施して連服二週間にして結石をば溶解流出せしめたが、其後再發することがなかつた。

加藤玄伯氏にも治例がある。丸善の店員杉浦某（四十五才）が、膀胱結石症にて專門大家の治療を受くる事十數年、病勢一進一退全快するに至らず氏を訪ねた。氏は腹證に從て主方大柴胡湯に大黃牡丹皮湯を兼用として投藥し、服藥九日にして小指頭大の結石二個と大砂の數塊を排出し脫然として輕快した。結石排出時に多少の苦痛ありしも醫手を籍るまでもなく短時間に排出し、その後同方二週間の服用に依て全快し爾來五年餘再發せぬとの事である。

また加藤氏も膽石病の治例を持つてゐる。水戸市外五臺村の小高某（四十才）

が、約二十年前二十一才の時、夏日冷水の過飲に原因して胃痙攣を病み、續いて膽石症を發し、其後殆んど間斷なき劇痛發作を來し、發作時の注射等により遂に慢性モルヒネ中毒に陷り、縣下に於ける有名の病醫院は勿論、遠く東京醫科大學その他知名の大家に診療を受けたるも殆んど效なく、病勢益々增進して遂には一回の發作に一日十數本の注射を要するやうになつた。實に發病後二十年間に涉る慢性疾患である。大正十二年六月加藤氏は其治療を托され、腹證診斷に依て大柴胡湯の證を得たるを以て同方を主方とし、師家の一方神散を兼用として投藥した。服藥後約三ヶ月頃より次第に病勢緩解し、翌年卽ち大正十三年には一ヶ月乃至二ヶ月目に一回位の發作で濟む樣になり、大正十四年夏に至る約二ヶ年の服藥治療に依て發作全く來らず、その附隨症狀であつたモルヒネ中毒も共に全快したのである。

盲腸周圍炎の治療實例

漢方による盲腸炎の治例は頗る澤山あり、既に本章の第二節第二項でその治療の理論を說明したから、最早あれ以上に引例の必要はあるまい、でその代りに盲腸周圍炎の治例を引くまた和田氏の例である。

下谷竹町の松本某女、年十一歲で一日腹痛を發し熱發咳嗽した。そこで近傍の醫にかかつたが、七日を經てその症狀が更に險惡となり、よつて某醫學士に轉じた。之にかかつて服藥六日、遂に危篤に陷り、醫學士は謝して他醫に委ねん事を乞ひ、第三醫も來つて共に絕望を宣した。そこで和田氏に診を求めたが體溫三十九度强で、腹部が堅く太鼓の如く膨脹しており、心窩部が幾分か軟かなるのみであつて腹痛が間斷なく、之を診るために撫でただけで、痛みが激增するといふ有樣である。

顏面は黃疸性の黃色を呈し、胸部には水泡があつて、無力性咳が出てゐる。而して腹は心窩を除く外は、腹部一般に濁音が聞えるのである。——まさに腸

管の大部の炎症であり腹膜も橫隔膜も共に其累に罹り更に黃疸と肺炎とを併發してゐるのである。洋醫から見離されるのも無理のない症である。——まことに難症ではあるが、まだ絕望と云ふ程でもなく、それで治すべきを告げた。

主人が氏の醫院に來つて改めて治を乞ひ、前の主治醫たる醫學士が共に商議して之を治せんとの意あるを語つたので、氏は治療を謝絕して、西洋流の醫者は無學であつて、漢方の微妙が分らず、下らぬ目前の屁理屈ばかり云うて人を詰るの弊があるから不快であり、合議して治療するはお斷りする、前の醫者にかかつて下さい、と云つてのけたとの事である。そこで主人は死生をあげてお任せすると云ふ事になり氏は始めて投藥をした。

氏は大承氣湯を主方とし、小柴胡湯を兼服せしめたが、四日にして咳が止み黃疸は殆んど消失し、よつて兼用湯をば伯州散に改めた。數日にして、腹痛全く去り、食慾も出て來た。その後數日して診るに、腹の底が化膿してゐるらし

いが膿が無くならねば腹痛も發熱も去らない。然し治療を急にしたければ開腹術を行はねばならぬが、見るところ食慾が盛で活氣が旺盛だから、數日を待つたならば、膿が排泄口を求めるために、必ず腫起が出來るであらう。その時に孔をあければ、小さくて濟むからと待つてゐると、果して數日後に臍の横が突起して來て、大さが李の實ほどあつた。

そこで氏はその頂を刺すと純膿が三合ばかりも出、その後一日に三四回づつ毎回七八勺を搾出し、排膿十數日にしてその量が漸次に減じ、食が大に進み肉が肥えて來て、しきりに學校に行きたがるので、繃帶を嚴にして體操を休むことだけを命じて登校せしめ、爾後十數日にして全快した。氏の投藥は六十五日であつたと云ふ。

耳內乳嘴瘤 兼 鼓膜潰裂治驗

同じく和田氏の治例である。

東京府下高木村の尾崎氏、年十八、前年耳垢を摘出せんとして誤つて右耳孔を損傷し、ために耳漏に變じたので一地方醫の診治を受け、數月にして治效なきも、甚だしき障害なきを以て放置して置いたが、十八の五月、身體發熱、右耳疼痛膿の流出增加し頭痛が甚だしく、遂に東京某醫の治を受けたが數ヶ月にして殆んど應效がない。よりて其專門醫に轉じ、治療二ヶ月で治效なきのみか耳孔壁から乳嘴癌（イボ）を生じ、漸次增大して耳孔を充塡し、益々惡候を呈した。そこで某專門醫は其治術の及ばぬ事を恐れて謝して、專門の某博士に轉せしめた。博士は之を診ること數日の後、遂に耳孔を穿開してイボを切取るの外手段なしとし、手術を約するに明後日を以てした。

然るに和田氏は當時軍醫であつたが、知人を訪ね、その知人の親戚たる該患者の事を聞いて、笑つて後學のために博士の手術を要する病の一診を許せと云うた。卽ち其父は該青年を連れ來り、濕布をとつて見るに、耳孔からイボが突

き出し內部を見ることが出來ず、膿汁が流出してゐて、少しく貯膿する時には耳痛のために眠れぬと云ふ。

和田氏脈を診るに、弦にして數、少しく發熱ありて咳が出てゐる。よつて氏は斷じて曰く「鬱毒ありて伏熱を兼ね、然るに內毒を治せずして徒らに外部を攻む、本末を誤る者と云ふべし、コンナ敵何ぞ及に血ぬるを要せんや、內治透徹せばイボも亦自ら消滅すべし、耳孔の穿開を誤らば一命を損せん。たとへ誤らざるも亦一耳を廢すべし、危險にして失ふところ大ならずや、若し予が言に聞かば、服藥三四日に及ばば夜間安眠を得ん」と知人の前であるから、はばかる事なく壯語した。

ところが其父が深く之に感じ、以て治を委ねた。よつて押賣治療をなした。卽ち葛根瀉心合力方を主劑とし、排膿散を兼用せしめ、耳孔には綿花に麒麟膏を塗つて貼附せしめた。かくすること四十餘日にして、イボが全く消滅し、漸

く耳孔を見ることが出來たので、耳鏡をとつて見ると、鼓膜が全縱徑にわたつて、幅二厘ばかりの潰裂を形成し、聽力は骨導によつて僅かに存せるのみである。鼻孔と口とを閉いで强く呼氣を營ましむれば、耳底より膿汁の氣泡が噴出して來る。

そこで更に同じ處法を用ふること二ヶ月半にして、鼓膜の裂孔が漸く癒合連續したが、尙ほ稀膿が少し出るので、反鼻加大黃湯に轉じ、一ヶ月ばかりにして全治し、聽力に少しの障害を殘さず全快まで通計百五十日を要したとある。此外に漢方では中耳炎も、非手術で完全に治療することが出來、中耳炎の非手術治療は別法として、食療法の石塚氏の家にも傳つてゐる。

丹毒の治例

和田氏が漢方を侮つてゐる洋方醫を知つてゐたが、彼はたまたま丹毒病に罹り數醫が交々治するけれど遂に一つも效を奏せず、七八日にして腫脹發熱が甚

だしく、譫言、妄語し命が旦夕に迫らんとしたが、十二三日の頃丹毒の血清注射をなして、少しく安きを得た。その頃和田氏が所用あつて彼を訪ねたが、彼は血清の殊效を稱賛して止まなかつたので、氏は所信に言及せずに歸つたが、後一箇月もたつたが全治せず、全經過に殆んど數箇月を要したとの事である。

それから間もなく、一患者が氏に丹毒の治療を求めたが、右耳翼から起つて右頰に及び、殆んど右半面が腫脹し、體溫が三十九度餘もあつた。氏は患者に向つて十日で全治せしめることを約束し、排膿散を分服せしめ、兼て巴豆製の下劑を頓服して、峻瀉數行を取らしめたが、二日にして右頰は殆んど平癒し、更に左耳邊から後頭部にわたつて腫脹を呈したが尙ほ前方を與ふること四日、餘毒が全く治し、通計八日ですんだ。

肋膜炎の治例と理論

世に肋膜炎を患ふ者が多いから、此療法と治例に就ても一言するのが便利で

あらう。

肋膜炎は大別して乾濕の二症とする。卽ち肋間腔に漿液の停蓄するを濕性肋膜炎とし、蓄水せぬのを乾性と云ふ。——而して二者ともに肋膜面に炎症を發するので蓄水するのは炎症面から、恰も火傷で液體を滲出すると同じ樣で、漸次に肋間腔に停蓄充滿するのである。——故に炎症が主で蓄水は從である。

然るに洋方は蓄水を主とし、蓄水排除を行つたり、發汗劑を投じて汗を淋漓たらしめたりする非法をやる。而も蓄水排除は後から後からと蓄り、發汗法は身體の疲勞と衰弱を來すのである。肋膜の蓄水たるや、腎臟より排出する尿の如きと根本的に性質を異にするから、發汗法の如きの惡法たる事は論をまたぬ處である。——これ皆蓄水を主として治療せんとするからである。

之に反し漢方は主症たる炎症を主として治療し、蓄水の如きの有無は考慮しない。故に主症治すれば附隨症も自ら治するの理により、炎症を治する事によ

つて容易にし得るのである。漢方は主を治し、洋方は客を治せんとする。

木村博昭氏常によく此症を治し、呼吸器專門病院にて五箇月、蓄水排斥三回にも及び、後放置して身體絲の如くなりしを二箇月にて活した例がある。洋方醫は肋膜には絶對的の安靜を說くが漢方では餘程の重症でなき限り安靜を命せず、普通に仕事をしたり、運動したりするを差支なしとし、簡單なる風邪を治するが如きで、洋方醫に絶對安靜を命ぜられて來た者が、氏の話などを聞くと却つて輕き言葉に驚く者が少くない。

治例は頗る過多であつて、一々これを述ぶることは省いて置く。

佝僂病の治例

和田氏治例。——日本橋箱崎町某女子七歲、その年の初から胸背が突出し、漸次に彎曲し來り某醫の診を乞うたが脊椎病で、藥治すべからずとなしたので更に某病院長の診を受けたが、院長も同樣の言なをし、藥治に兼てコルセット

狀の副子を施し、以てますます彎屈せざる樣に許つてあつた。

この病家の親戚に和田氏を知るものあり、氏の診を乞うた氏は之を見るに、脈狀は稍々弦大で、腹筋は攣急し、胸背ともに突出してその橫徑が頗る增大し衣服の外より、背部の苦出が見られ、時を問して呻聲をもらし、胸背に突痛がある樣である。

氏は之を見て、これ佝僂病であつて椎脊の病ではない。脊椎の兩側の筋が攣縮するによつて起きるので、筋さへ伸ばし得たならば、脊骨も自ら伸展するであらう。急には治せぬが長くかかると云ひ、東洞翁の癇治の方にならつて、通利を計り、二週間ばかりにして柴胡丸に轉じた。然るに服藥凡そ三週日で、漸次に脊柱の伸展が認められ、通計二箇月半で全く平常に復したとの事である。

氏はこの事を他の醫者に語るも信ずる者がなく、不治の難治を治すとは誇大の言であるか、或は誤診であると云つたとの事である。まことに洋方醫から見

れば、漢方醫がかかる奇蹟をなす事は、不思議と云ふの外はなく、誤診とでも罵るより方法があるまい。

心臟病の治例

心臟病は洋方では、殆んど治療の方法がなく、その肥大症を治して心臟を縮小せしむる事は、洋方では今日と雖も出來ぬのであるが、漢方は昔から之を治して來たのである。――この心臟肥大を縮小治療する事は、岸本雄二氏によつて漢方とは異れる方法によつて達成せられたが、この發見があるまでは、心臟病の治療は世界に於て、漢方の一人舞臺であつた。

本村博昭氏は本郷肴町の某道具屋の主人で、年四十になるのが過度の飲酒と不攝生によつて、非常なる心臟肥大と動脈硬化を來し、某博士から死期の二年を出でざるを斷ぜられた者を治した。氏は患者に酒さへやめれば「心臟を再び縮小して一生役に立てやうにしてやる」とて禁酒を盟はしめて投藥し、日に日

に目立つやうに心臟を縮小せしめ、以て某博士をして驚歎せしめしと云ふ。同患者が治療を受けたのが、今から二十年前で今日なほ健在である。

漢方では單に心臟肥大や動脈硬化のみを治し得るのみでなく、木村氏の如きは、或程度の瓣膜病の患者をすら治すので、この心臟の畸形不具をすら輕減せしむると云つては、今日の洋醫の何人も實地を見ぬ中は、全く信じ難き程で一種の神術たるかの如くである。木村氏は心臟病では全身がマリの如くはれてゐる患者のみを治する事が出來ぬのみであると云つてゐる。

痲毒性睪丸炎の治療

千葉縣人黑田某が痲毒性に罹り、三洋醫の治療を乞ひ四十餘日を經過したが癒えぬので、木村博昭氏の門を訪ふた。曰く三醫とも治方を異にし、その中二人は冷却せよと云ひ、一日は之を溫蒸せよと云ひ今なほ醫えぬ。而して何れにするかに迷ふてゐると。木村氏曰く皆不可なり、ただ内服の一あるのみ何ぞ外

用方を用ひんやと。卽ち之を診るに右睪丸は腫脹して且つ硬固にして大さ夏蜜柑の如く、疼痛が甚だしく、兩手の指で提扛保護するに非ざれば、寸時も堪え得ぬ樣である。木村氏曰く、腫脹の減退は急卒には行かぬが、予の藥を服せば二三日にして疼痛が過半を減せんとて騰龍湯を投じた。然るに二三日で腫脹が少しく減じ皺襞を生じ、疼痛は十中の七を去つた。かくすること三週間で、盡く原形に復した。同患者がまさに癒えんとする時、患者の同鄕人が同症を患ふるものあり、某醫學士に治を乞へど疼痛甚だしく、腫脹が增加して苦楚動くことが出來ず、前者を通じて來診を乞ふた。そこで木村國手は行きて診るに、左睪丸が赤色硬腫して、大さが前患者よりも甚だしく、從つて疼痛も一層に激しく、身體を寸轉分側することも出來ぬ。そこで氏は同じく騰龍湯を處したところ、翌晩には稍輕快を覺え、三日の後には疼痛大に減じ、起居意の如くなり、二週間目には全癒して休藥するに至つた。睪丸炎の初起、卽ち微腫、微痛、惡

寒發熱等の症を見ば、直ちに同方を投ずれば、決して大事に至らぬ。淋病の冷却やブジー療法は實に危險至極の姑息療法である。

痔疾の治療例

ある僧侶が痔疾にかかつて西洋醫に治を乞ふた。その洋醫は肛門の腫脹突起の甚だしいのを診て、之を冷却するに非ざれば病が癒えずとなし、氷囊を貼ること四五日、局部はますます硬腫劇痛して起臥轉側することを得ない。よつて注射療法のために醫を轉ぜんとしてゐる時、木村國手を傳聞し來診を乞ふた。よつて氏が診るに肛門の右側に隆起の硬腫を見、その色紫赤にして大さ柑子の如く、疼痛が甚だしく一指も觸るる事を得ない。大便は少しく秘結し、便後苦悶甚しく右轉も左轉もならぬ。全身證としては心臟辨膜の異狀により、左室肥大擴張せるを認むるのみである。氏は之を診を終りて貴僧の病は治すべし、然し療法は西洋と反對なりとて、當歸蒸を以て絕えず溫蒸方を行はしめ、服藥と

しては大黄牡丹皮湯を以てし、之を攻むること三日、疼痛大に減じ、從つて起きる事が出來、腫脹日に減退して十四五日にして全治した。

木村氏は常に痔疾の療方としては硬腫疼痛の甚だしき時は、大黄牡丹皮湯を以てし、室内を歩履する事を得る症には乙字湯を處し、出血の甚だしき時は芎歸膠艾湯か三黄湯を以てし、長日月の間出血が止まぬため、全身が蒼白色を呈し浮腫を帶び、歩く時に心動亢盛し呼吸の逼迫する症には茵荆湯か加味四君子湯を以てせられてゐる。而して貧血症を除くの外は乙字湯の一方で足れりと云ふておられる。而してその適應症は痔核、脱肛、硬腫、疼痛、或は出血等に及んでゐる。なほ出血の兼用としては本方の何たるを問はず、黄解散か剪紅散を可とすと敎へられてゐる。

以上の方を運用する時は、敢て注射や手術の療法を要せぬ。何となれば痔疾の原因は、專ら内部に存するので、内服藥のみで之を治するのである。

赤痢の治療

往年某地方に赤痢病が大流行をなし、之を避病院に收容しきれず自宅治療を許した事がある。時に某農家の婦あり、年三十餘歳、姙娠七箇月にして赤痢に罹り、上厠すること晝夜百二十回、裏急後重甚だしく、體溫が前に四十度に達したものが漸々下降して、反つて常溫に達せず、三十四五度を往來し、食欲は殆んどなく、煩渴引飲が甚だしいが熱湯を好み、心臟大に衰弱し尿利が更になく、脈性は沈微にして力がない。檢疫醫及び治療醫とも曰く、恐らく半產を免かれず、且つまたこの衰憊者にして此重患、何の活路あらむやと。ここに於て治を淺田宗伯先生に求めた。先生之を診て頗る難症であつて、衰弱が極度に達してゐるけれど尙ほ一縷の望みがありとし、卽ち清觀湯を處せられた。服すること三四日で赤便が大に減じ、隨て下痢も晝夜三四十回に減じ、小便始めて利した。八九日にして便の赤白物が全くなくなり、便は軟質となり尙ほ十回に及

ぶも病者は大に氣力を得て湯渇が殆んど止んだ。而して食意また大に振ひ續て服藥すること二週間にして稍や平便に復し、身體また大に回復し、遂に半產せず臨月に至つて男子を分娩した。

次に淺田門下の中村昌惠氏は先年、某貴族の老夫人の赤痢を治した。夫人年六十餘、赤痢に侵襲せらるる事三週間、赤白物を下痢すること晝夜七十餘行、便前は裏急、便後は後重、その急迫衰弱は名狀すべからざるものがあつた。心下硬滿し舌胎は黃色を帶び、口咽が燥渇して冷水を欲し、飲食物は僅に粥汁を啜るのみ、體溫三十九度を上下し、脈も微弱である。發病以來、その門地によつて博士學士、或は陸軍病院長を招くも寸效がない。よつて親族相議して曰く蓋し西洋醫療の技はかくの如く盡きた、むしろ漢方に轉じて見たら如何かと中村氏に治を乞ふた。氏之を一診して老體にして且つ衰弱が甚だしきが尙ほ治すべしとて、大柴胡湯を投ずること數日にして血便大に減じ便數また二十回に減

じた。そこで黃芩湯に轉じたところ、三四日にして病勢とみに退却し便中全く赤白物を見ず、便は一日三四行となり、爾後一ヶ月にして全治した。

また野津猛男氏の師たる漢方醫の井上香彥翁は、往年赤痢が大流行を極めし時、一村數十名の患者を受持つて、一人も死者を出さなかつたと云ふ。如何に漢方の偉大なるか知るべしである。

腎臟炎の療法と治例

腎臟炎を急慢の二症に大別する。その病質に多少の差があるが、全然異るを以て之を分つに非ずして、經過の長短によつて名を區別するのである。故にその急發の際に於て速に之を治したならば、慢性に至る者が極めて少ないのである。凡そこの病は急慢にかかはらず、世に甚だ多い。故にその治療法をも玆に一言しやう。

それ腎臟炎の症候として最も明白なるは、尿中の蛋白質と外部症狀としての

浮腫である。浮腫の甚だしきものに至つては、兩眼閉塞して四肢斗の如く、軀幹もまた從つて水氣充滿してゐる。――故に之を療するには身體より水液を驅逐して、尿中の蛋白質を消滅せしむるにあるのである。然るに西洋醫方ではこの水腫を治療するに、藥劑療方よりも牛乳療法を以て專一としてゐる。卽ち患者の男女老幼に拘らず、一日四五合より七合乃至一升の牛乳を飲ましめ、以て尿の汾泌を多量にして、その水腫を減退せしめんと欲し、然もその尿利が良くなく水腫が更に甚だしくなる時は、劇烈なる下劑を投じて以て一日十數回より二十回以上も水瀉せしめて、その水腫を一時的に驅除せしむるのである。

然し之は根治的療法でなくて姑息的な一時驅除であつて、再び水腫を起さざるを得ないのである。それ水腫を治するには、禹が洪水を治めた如く、必ず水理によらねばならぬ。若し然らずして逆道による時は、汎濫極まりなきに至るであらう。腎臟炎を牛乳を以て療せんとするは、あだかも排水の惡き溝道に大

雨の沛然として降るが如きもので、體內の溢水に加ふるに又多量の液體を以てし、その病體は體水の外に更に牛乳の水分をも排出するを要し、機能の不完全なる腎臟をして更に能力過重に陷らしむるものである。これ疲勞困憊せる牛馬に、荷を加重して坂を上らしめんとするに似てゐる。これ常識より考ふるも治療法の逆なるは當然である。思ふに洋方が牛乳療法を尊ぶ如きは、完全なる治療法がないからで、之に反し漢方では藥力が豐富なるを以て、縱橫無盡に加減して敢て他の物質の力を借らずとも治療し得るのである。卽ち洋方の腸より下水せしむるが如きは野蠻法で、利尿增加の藥を用ひて排水するに若くはない。

これに關する治例の二三を述べよう。

男子三十五歲、生來健全であつて疾病に罹りし事がなかつたが、一日顏面が沈鬱壓重の感を覺へ氣宇爽快ならず、口が燥き咽が乾て大に冷水を欲す。而も尿利は反て減少し僅に涓滴のみである。五六日に至り家族から面部に少しく浮

腫あるを注視され、尙ほ三四日を經て全身に蔓腫す。よつて木村氏に診を求めた。その症狀を概記せば、則ち水氣顏面に滿ち恰も假面を覆れるが如く、下肢は指壓を加ふれば陷沒すること三四分、尿利も一晝夜二回で極く少量である。食量は平素に比して稍少く大便常に異らず、脈性沈にして數、打診聽診に異狀がない。よつて氏曰く他の臟器に水腫の原因を認めず、恐らく腎臟炎ならんと檢尿せしに果して多量の蛋白質があつた。よつて東洋赤水豆湯去將三日の量を投じた。然るに飲了して來て曰く、昨夜より尿利快通し、本朝の如きは發病以來の多量なりて、續て同方を與ふること五六日に及び排尿增加して晝夜十八回に至り、服藥後十四五日にて殆んど癒え、三週間にして休藥した。その間牛乳は一滴も用ひぬ事は勿論である。

また三十一歲の女が同病に犯さるゝ事三年、醫を變ふること七人に及んだが治せぬので、木村氏に診を乞ふた。病症は略するも同患者は稀れに見る水腫の

甚だしきもので、一例をあげれば兩股及び陰部が膨腫して股を開くも放尿せられず、食陰に隨て流出するのみである。蛋白質もまた甚だしく多量であつて稀に見る處であつた。氏は之に服藥せしむること四箇月にして全治せしめた。

奥田謙藏氏にも治例あり、急性のものを治せし興味深き例である。二十五歲の女が、產後二三日を經て動悸を自覺し、且つ兩脚が漸次に水腫の狀あるも醫療を施さずして放任したところ、一日突然、全身に水腫が起り、煩噪悶亂まさる絕せんとする狀ありて診を氏に乞ふた。氏行きて診るに上述の如き極度の全身水腫であつて、顏面、體幹、四肢ことごとく腫滿せざる所なく、就中腹部は太鼓の如く眼瞼は上下相接着して眼を開く能はず、口鼻より血液を喀出し、口唇はチアノーゼを呈し、脈は細、數且つ亂調、僅に身前に疊積せる高き蒲團によつて煩悶苦惱呻吟してゐる。氏は辛ふじて腹證を診定し、胸部を聽診し、後斷を下して曰く、僧帽瓣閉鎖不全症に因する代償機失調なりと、先づ危篤を宣

し、殆んど恢復は望むべからざるも、辛ふじて診し得たる喘滿と心下痞堅との兩證により、木防已湯に茯苓を加へ之を連進せん事を命じた。然るに翌日早朝に至つて使者が來つて云ふ、藥效大に現はれたるを以て再び來診を乞ふと。即ち往いて見るに前日の全身腫滿者は今日の骨立羸瘦者と化し、全く別人の如く眼瞼は陷沒し、腹部は舟底狀を呈し、喀血止み喘滿苦惱が去り、病床に安臥して頻りに再生の恩を謝した。氏は藥效の餘りに顯著なるに驚いた。即ち具さに服藥後の狀を聞くに、服藥當初、患者は殆んど神識朦朧たりしも、暫くあつて尿意の狀あるを以て看護の者が便器を與へしに排尿瀧の如く、然も連續して止まず、周章狼狽のうちに漸く便器を交換し、かくの如くなる事少時、患者神識を恢復し水腫頗る減退し、漸く安靜の狀を呈した。續きてまた排尿あり瀧の如しと。その後排尿の度を重ぬる毎に水腫いよいよ減退し、諸症狀從つて雲散霧消して以て今朝に至つたと。そこで氏は前方を停止し、苓桂朮甘湯に牡蠣を加

へて投じ、同方を服用すること十日にて全治したと云ふ。

腦黴毒及び脊髓勞治例

兵庫縣御影町某男三十九、生來强狀であつたが、昨年八月より神身に異常が見え、頭が重く肩や背が拘急し、右側の手足に微かに鈍麻を感じ、時々痙攣を覺え、遂に舌運動と言語障害を併發するに至つた。一二の醫家の診を經て專門大家の診斷を乞ふたところ、惡性の腦黴毒症であつて、如何とも治療の法なく豫後不良なるを宣せられた。そこで家人が凝議して昨年四月中野康章氏の診を乞ふた。氏は之を診るに、病症は腦黴毒症の定型を供へ、瞳孔反應遲鈍で殊に心悸亢進が甚しく、脊柱を檢するに微かにS字狀形を呈せるを見、また先天的に心臟異狀症のあるのを見た。——中野氏は數百の心臟病患者について小兒と大人とを問はず、脊柱のS字形を呈するを認めて、心臟病診斷の補助徵としてゐる。——かくて氏は本方に柴胡龍骨牡蠣湯去鉛丹加四味を與へ、化毒丸を兼

用せしめたところ、三十日にして心悸沈靜し、安眠を得るに至つた。よつて本方を頭風神方に轉じ連服四箇月にして言語障害が殆んど舊に復し、他症も亦從つて減退し、後一箇月にて全快して商業に從事してゐる。

また大阪市東區玉造町某、男四十五は平素强健人に過ぎたが、七年前より兩下肢が倦怠し、脚氣樣の異狀感を覺え、脊髓勞なりとの診斷を受け、洋方大家その他を歷訪すること十幾人、六〇六號の如きも三十六回も注射し、最早や策の施すべくもなく病は一日一日と進んで、全くの步行困難に陷入てしまつた。

そこで中野康章氏の事を傳聞して診を乞ふた。よつて氏は桂朮苓附加鹿角を本方とし、化毒丸を兼用として與へたところ、服藥後十五日にして患者は自轉車に乘つて氏の處に來り告げて云ふには、先生の藥を戴きつつ重ねて六〇六號の注射を試みたところ、奏効が前回の比に非ず、步行自由を得るかくの如しと述べ、漢方を輕蔑する如き口吻があつた。氏は之を見て直ちに六〇六號のため

に非ず、漢藥のためなるを直覺し、他方を併用するならば治療を謝絕すると答へた。然るに患者は驚いて無禮を謝し、他の治療を受けざるを約し、前方を連用すること十箇月にして步行が全く舊に復した。

乳腺炎、小兒耳下腺炎治例

大阪住吉區住吉某妻、分娩後十箇月にして左乳房中に一小核を觸知し、その日卒然として發熱三十九度以上となり、疼痛が甚だしく、十餘日を經て腫大潮紅を呈し、發熱解せず、醫はすすむるに切解の時期が來れりとなした。然るに漢方の非手術治療を傳聞し、中野康章氏に治を求めた。氏は本方に十味敗毒湯加石膏を用ひ、伯州散を兼用せしめたところ二週間にて全癒した。

大阪市北區桶町某娘十三、腺病體質にして時々高熱を發する特異症があり、本年十月初旬に右耳下腺が起腫し、發熱四十度に達した。醫に治療を乞ふたところ冷掩法を施し、若し散せずして化膿せんには切解するに如かずと云ひ、か

くすること三十日に及び熱は更に減退せず、起腫鵝卵大となり、遂に言語と食物燕下の困難を訴ふるに至り、中野氏に治を乞ふた。氏は先づ本方を五香湯忍冬連翹夏枯草とし兼用に妙功十一丸と伯州散を與へた。然るに六日にして熱は全く去り、言語と燕下が自由になり、二十日にて全快した。

強度黄疸症

大阪此花區下福島、某妻四十二歳、二十年前に嫁して三兒を擧げ頗る強壯であつた。然るに本年七月下旬、一夜腹疼痛、發熱四十度に上り、時々強度の惡寒を發し、全身の皮膚は黄土色を呈し、舌は乾燥し嘔吐が止らず、この症が持續すること二十三日に及んだ。一醫は初め十二指腸カタルとしたが、後三醫を迎へしに肝臓に因する惡性黄疸症として絶望を宣せられた。よつて附近の中野氏を迎へて診を乞ふた。氏之を診るに幸にまだ虛脱の症る陷入つてゐない。それで氏は全治すべきを語り、先づ小半夏湯加茯苓伏龍肝を作つて、冷飲嘔を防

ぎ、傍ら大紫胡湯加茵蔯芒硝を與へて化毒丸を兼用させた。然るところ翌日主人が來て大に喜んで告げて曰く、お蔭にて愚妻の一命を拾ひ得た、何師の秘藥を與へられたかと尋ねた。氏は此時淺田の門にありし事を述べ、漢方には秘藥などはない、ただ師の法を繼ぐのみと語つた、夕方患者を診るに腹滿發熱が大に減じ、患者は涙を流して悅んでゐた。よつて芒硝を去り連服十五日にして黄色が殆んど去つたが、なほ皮膚は枯燥し衰弱が甚だしいので、六君子湯加茵蓮に轉じ連服二十日で黄色が全く去り、座臥が可能となつた。そこで解毒湯加荆防連翹に轉じ、連服三十日にて全く治癒してしまつた。

その他の治例は之を畧す

この外、洋方にては絶望を宣せられ、漢方では容易に治療し得た實例は澤山にあるが、一々病名に就て之をあぐるならば、優に浩瀚なる一書をなすに足る然し本書は元來、臨床治療の參考書として書いたものでなく、洋方醫學の盲拜

を覺醒せしめ、醫家に志すところの全日本の青年に對して、漢方の眞價の一面を知らし、以て彼等をして漢方復興の運動に參加せしむべき、小冊子に過ぎぬが故に、更に細論的方面に於ては、近年續刊の豫定となせる『漢方醫學大講義』にゆづつて置く。故に予の治例掲出はこれだけに止め、最後に數個の問題に就て概然的に一言するに止めて置く。

黴毒の療法に就ては、既に泰氏の手によつて洋方第一の注射療方が達成されたが、これを以て世界唯一の方法と思ふならば、飛んでもない無學ぶりである。甲斐の德本の薫法療法の如きは、とてもサルバルサンの如きが比較になつたものでない。德本の薫法とは鉛と水銀の合劑を線香となして、その煙をば呼吸器の粘膜面より吸收せしむる方法で、その偉大なること驚くべきものであり、藥物的驅毒法として世界第一のものである。德本にはこの薫法が十方あつて『十薫法』と云はれてゐる。これは水銀や砒素を主劑とするもので、藥石の及ばぬ

難症をよく治療するので、皮下注射や靜脈注射の如きものの、とても足下にも及ぶ能はぬ處とて田代氏の如きは賞讃して措かない處である。

世界的流行性感冒も、洋方では治療ほとんどなく、死者の續出する有樣であるが、之も漢方では卽日、頓挫解熱せしめて、同じく五六日で全快せしめ、從つて死者を出す如きことも絕無である。

陰囊ヘルニヤは洋醫方では、切開縫合でなくば根治し得ないのであるが、漢方では服藥に兼ぬるに灸點を以てすれば、二三週日にて全癒し得るのである。

急性(コロープ性)肺炎の如きは、洋方では殆んど治療の方法なく、自然の治期を待つのみで、從つて往々にして死者を出すものであるが、漢方では卽日に頓挫解熱せしめ得て、その後僅かに五六日間、輕微なる咳嗽をのこすに過ぎずして全快し、死者を出すことが絕無である。

予はいま本書の再校正の筆をとりつつ、計らずも　先帝陛下の大喪に逢ひ、

然も　陛下が御肺炎にて崩御ましませし事を漏れ聞き、今更に漢方の偉力を考へ、同方を宮中にすすめ得ざりし微臣の無力に涙滂沱たるものがある。　先帝陛下は御幼時に多病にましまし、淺田宗伯先生の治し奉つたのであり、先生は御養生さへ漢方的に涉らせられたなら、寶齡の五十五に涉らせらるるを豫言したのであつたが、不幸にも宮中の御衞生は西洋式の加味さるる多く、再び御病にかからせ給ふた。昨夏　聖上の御微熱に煩まされられし時、岸本雄二翁は宮中の御食事を菜食主義にかへ、かつ　聖上の御微熱を取り申すためカルクスをすすめ申さんとて八方運動せるも、遂に用ひられず、今大喪に會ひて悲しみのいや深きものがある。

而して更に御肺炎の事を思ふては、急に校正の筆をとりて、他の事項を抹消して、漢方の肺炎の治療を加筆する次第である。

凡そ洋方醫術に於ては、肺炎はカタル性とコロープ性たるとに論なく、殆んど手當の方法なく、去痰劑や下熱劑を用ひて自然治癒の外なき物なるも、漢方では血痰、咳嗽の甚だしきものでも、一夜にして殆んど頓坐せしむる事が出來その神効驚くべきものがある。木村博昭氏は非常に澤山の肺炎治例を有しておられ、カタル性とコロープ性ともに主として竹茹溫膽湯を用ひておられる。勿論同方は腹候によつて人々によつて加減あるは當然である。肺炎の如き漢方にては簡單な疾病であり、長恨歎息せざるを得ない。

慢性胃痙攣の如きは、洋方ではモルヒネ注射を連續し、ために遂にはモルヒネの中毒症を起さしむるの外なき難症であるが、漢方では全治に三週間もあれば十分であらう。マラリヤの如きは、洋方ではキニネーを寶の如くしてゐるが之も漢方に及ばず、キニネーはまま中毒性を起すが、漢方では然ることなく實に易々たる疾病である。また病衰した十二指腸蟲の如きも、德本の方法を用ふれば、絕食その他の苦痛と藥物中毒の危險なく、漸次的に容易に驅除するこ

とが出來る。

此外レウマチスにしろ、淋毒性子宮內膜炎にしろ、決して物理的方法や、洗滌の如きを全然要せずして、全く內服一方にて治することが出來る。

第六章　漢方醫學近代化の部分的達成としての岸本雄二の業績

一、自家中毒病の系統とその治療の發見

漢方の優秀なる事は、既に早くより識者の間に認められて來つつあつたが、如何にせんその組織と系統が複雜で習得入門に困難なるため、一方に大天才の出現を見ると同時に、他方に多數の庸醫の群生するは止むを得ぬ處であつた。かくて漢方の組織と體系を更に平明ならしめて、入門を容易ならしむる必要が

痛感されてゐたが、意外にも光明は他から投ぜられた。それは馬政局技師として勳功ありし、獸醫學博士、岸本雄二氏の自家中毒病の系統の發見と、これを極めて簡單に治療する方劑の發明とである。

明治三十年頃、ドイツ公使館付武官にマインケと云ふ富豪があり、非常なる愛馬家で、その廐には十一頭の名馬を繫いでゐた。然るにその馬が一年を經ぬ間に八頭まで斃死し、その病症は悉く骨軟症であつた。マインケ氏は之に驚き「日本には恐ろしい家畜の傳染病がある」とて陸軍大臣に獸醫の來診を求めた。かくて岸本氏は命ぜられて、その廐に臨檢し、馬の飼養や管理の全般に涉つて細密の調査をなし、殘存せる三頭の中二頭までも骨軟症病馬たるを見、遂にその斃死の原因が、馬匹飼養法の錯誤、卽ち飼料として一日一斗の燕麥を煮熟して與へつつあるを發見し、玆に始めて同病が不法飼養に基くもので、先進學者の唱導するが如き原因に基くものでない事に氣付いた。

かくて氏は病馬を乞ひ受け、一頭には減食と同時に當時の文獻にある總ての療法を盡し、一頭には絶對に穀飼料を與へず單に乾草のみを投じて何等の治療を施すところなく、日々精密なる監督の下にその經過を看視したところ、二頭とも同一の經過をとつて五箇月を經て全治をなした。これ氏が自家中毒の研究に立入つた動機で、爾來二十年間、氏は全く牛馬豚犬に就て實驗し、その疾病は骨軟症に止らず、甚だ廣汎なる疾病部たるを知り、その治療をなすこと千件を越えた。

かく動物試驗を重ぬること二十年、今より十年前に始めて研究を人體に移したが、その治療の適確なること、家畜の比でなく、目下洋方にては治療すること全く不可能であり、ひとり漢方のみ治療しつつありし處のものを、より簡單に平易に治療し、自家中毒症の系統を明かにするに至つたのである。

氏は獸醫である。然るに家畜は物を云はず、人間に於けるが如き問診をなす

を得ない。勢ひ指頭によつて脈候と腹候とを求むるの外はなかつた。かくて氏は漢方的診斷を自得し、腹診に於て肝臟肥大や結腸や盲腸部の輕微の炎症をも問診によらずして知り、且つ打聽によつて心臟の肥大を極めて正確に測定し、血壓計をも使用しつつ、漢方的な脈候の取り方を以て器械以上に精細なりとしてゐる。氏が物を云はぬ獸醫であつたればこそ、診斷法が期せずして漢方に一致したのである。氏の發見した藥を飲む時は、殆んど多くの場合、漢藥を服用した時に起る冥眩作用と同じき自覺症を伴ふ。この點より見ても氏の方劑が頗る漢方的で、然も服用の簡單なる錠劑たる點は、漢方治療上の一進歩なりと云はざるを得ぬ。よつて特に茲に紹介推薦する所以である。

二、岸本氏の說く自家中毒病の範圍

然らば氏の說くところの、自家中毒病の範圍は如何なるものかと云ふと、概

略次の如きものである。

一、**心臟擴張(肥大)症**——總て動悸を感ずる諸病。脈搏結代症。狹心症。異常速脈及遲脈症。但し瓣膜閉鎖不全又は動脈口狹窄症の類を除く。

二、**腦病**——神經衰弱(精神病をも含む)常習又は發作性頭痛。腦貧血。腦充血(逆上)。子癇。眩暈。卒倒。不眠。生殖不能。

三、**喘息**——肺氣腫。肺水腫。咳嗽發作。呼吸困難。喘鳴。

四、**體質病**——**バセドー氏病**。佝僂病。小兒發育遲滯。夜尿症。

五、**體質關係の眼病**——炎症又は充血性にあらざる眼球內部の疾患に因る視力障害。

六、**消化器病**——胃擴張症(アトニー)。胃酸過多症。皷脹症。慢性下痢。便秘症。胃痙攣。常習腹痛。黃疸。口臭。

七、**皮膚病**——濕疹の各種。痒疹。蕁麻疹。疣贅。瘙瘡。鮫肌。

八、**脚氣**——急性(衝心型)慢性。濕性。乾性。產前產後乳兒脚氣等の各種。

九、**頑性熱阻**。**姙娠嘔吐**、**乳量減少**。

一〇、**俚俗**「むしけ」或は「かん」と唱ふる小兒諸病。小兒虛弱症。小兒便通不調

一一、**神經痛**

一二、**レウマチス**

一三、**腎臟病**、**蛋白尿病**、**糖尿病**。

一四、**百日咳**

かくの如く自家中毒症の範圍は、殆んど抵止する所を知らざる迄に擴張し得るのである。予は最近に膽石病や膀胱結石まで自家中毒の範圍でないかを疑ひ氏と討論したところ、氏の曰くに、まだ實驗例はないが或は然らんとの事であつた。之には論據がある。然し此處では其理由を述べておれぬ。

そもそも何故に前記の諸病を、同一系統の疾病なりと云ひ得るかといふに、

それは此等の疾病の全部が、いづれも心臓及び肝臓の肥大を伴ふてゐる、一種不明の病體であつて、それは氏が發見されたカルクスと云ふ單に心臓のみを縮少せしむる藥を以て、同樣に簡單に治し得るから、諸病の原因が一に屬する事を推定出來るのである。——之を現今の醫學に尋ぬるに、前記の諸病はその病理や病原の學說に於て明瞭を缺くもの多く、從つて的確の療法なく、たまたま之あるも未だ必治を期するに足らざるは今日の有樣である。——而もこれがカルクスの一藥が、病性と病狀に於て天地霄壤もただならざる上記の諸病を僅かに二三週日の短時日の間に治癒し得る所以は、病因が同一たることを證するものでなくて何であらうか。

翻つて考ふるに漢方に於ては上記の諸病に對する方劑があり、然もその病症診斷や方劑の運命は甚だ複雜を極めてゐるが、この部門は岸本氏の系統研究と治療發見によつて、頗る簡單化されたのである。つまり漢方がそれだけ簡單化

された譯で醫界發達のために甚だ慶賀に耐えざる所である。——氏の發見した心臓退縮藥は、予の知る限りに於ては、洋方には全くないもので、世界で最初の名藥とも云へやう。從來漢方には心臓退縮藥があるが、その効力の迅速さに於て岸本氏の方藥に及ばぬやうで、氏の藥を用ふれば、心臓の擴張は一週間乃至、二週間のうちに原形に復し、血壓も常態に下り、脈數の百若くはそれ以上を算したものが、同時に七十以下に減ずるのである。インシュリンと云ふ糖尿病に對する、殆んど無效な注射藥を發見して、ノーベル賞金を得た人があるが此人に比すれば岸本翁はノーベル賞の何個ももらつても足りない程である。

喘息は洋醫方では全く如何ともするを得ず、ただ痲醉藥かアドリナリンで一時的に發作を止めてゐるだけであるが、岸本氏の藥では容易に簡單に、全く他藥を用ひず心臓退縮の一藥のみで短時日中に根治し、また百日咳は今日傳染病に數へられ、ワクチンすら作られてゐるも、氏は斷じて傳染病でないとし、同

じ心臓退縮藥をもつて、瀕死の咳嗽に苦む者を二日の中に急を除き、一週間で全治せしめる。また氏は糖尿病や蛋白尿病をば、心臓の病的現象のために、腎臓が官能をあやまるだけで、腎臓には故障がないとしてゐる。

また乳兒脚氣に對しては、氏は漢方醫と同じく母乳を廢すべからずとし、母體の脚氣を治することによつて、間接的に治療せられる。更に氏は神經衰弱をもつて、腦質に病原を有する腦固有の病に非ずとし、心臓疾患に當然伴隨すべき、小血管内血行の障碍のために來れる、腦質榮養不給の發露たる一種の腦症狀に過ぎずとし、神經衰弱をば心臓退縮によつて治し、不眠症の如きは二三日のカルクスの服用によつて安眠させ、發狂者の如きすら其病症が黴毒性ならぬ限りは、二三日の服用で熟睡させ逆上を消退させる。

皮膚の痒疹や瘙痒、種々の濕疹も同じくカルクスの一藥で治し、更に眼球の結構上の缺陷に基く遺傳性の物及び、黴毒その他の傳染病に屬する物を除き、

視力の障害、又は眼球内部の疾病及び夜尿症は殆んど皆、氏によつて體質關係の疾病なりとせられ、カルクス療法が確實に奏功するところである。更にまた氏は齲齒の如きをすら、自家中毒による骨軟症のために生ずるものとして齒科醫學に革命的な暗示を與へており、且つその豫防法として、小兒時代よりの食物養生を强調してゐるのである。——これを今日の病理學より見れば、まことに荒唐無稽に見ゆるが、予は岸本説が、他日天下を風靡することを豫言してはばからぬものである。

岸本氏は大正十一年に自宅に於てその研究所を開き、醫師を聘して業を監督し、治療者三千以上にのぼつた。氏の治療は全く人助けに外ならなかつたが、氏が獸醫であつて人醫でなかつたがために告發されて、不幸にも法廷に立つて處罰を受けた。予はこれを見てガリレオが地動説によつて迫害された悲劇を回想せざるを得なかつた。——氏がかかる迫害と、學界の默殺裡に懊惱せらるる

を見て、予は敢然として同氏を援助し、氏の所説を『日本及日本人』に推薦し、且つ醫界の迫害より救ふたのである。

三、岸本説の要點と食滋養生

氏が家畜に就て自家中毒病説を主張した時は三十年前で、まだ自家中毒説は最近急術語すら珍らしかつた時代である。然るにその後この胃腸自家中毒説は最近急に注目され出し、内外の專門雜誌その他の報告等には、近頃續々研究として現はれつつあるのであるが、まだ一般の病理學の上に記載せられる程には發達して居ない、然し最近十數年この方急速の進歩を遂げた蛋白化學の研究は、續々自家中毒なるものの幾多病源となるべき事實を證明しつつあるのである。

氏の研究しつつある要旨を簡單に述ぶれば、凡そ食物中に含蓄せらるる蛋白質は、何物にせよ、一度はその基礎成分たる「アミノ酸」に分解しなければ吸收

せられるものでない。故に蛋白質は胃腸に入りて總て各種の「アミノ酸」に分解するのであるが、其「アミノ酸」は腸内の細菌により又他の酸に遭ふて容易に分解するものである。この「アミノ酸」の第二分解物の多くは多少毒性を有して居る。又一方米の主成分たる炭水化物は一朝消化に過ちある時は容易に酸に化し易いものである、故に、日本人の胃は多く胃酸過多症に罹りて居る。是れ日本——否總て東洋の米食國——に脚氣などの特異の病の存する所以であると云ふのである。

凡そ自家中毒とは毒ならぬ食物を喰して消化器内に毒成分を釀し、自ら毒にあたると云ふ意味で、食物の分量に於てか調理配合の方法に於てか或は又食品選用の方法に於てか、食物攝取の方法を過つときは其食物は正當なる消化を受けずして其傍らに存在する細菌の爲に腐敗性の醱酵を釀し、食物中の各養分は複雜なる二重分解を受けて無用若しくは有害なる異常成分となるのである。此

有害成分は元より砒素、阿片の如き猛烈なる毒性を帶ぶるものでないが、消化器內に於て隨て生ずれば隨て吸收せられ、組織間に灌流して罷まない細胞も組織も各臟器も共に其毒の侵害を被り、遂には生理の範圍を脫して、病的に陷らざるを得ざるに至るのである。從來病理學上から粘液質、腺病質又は惡液質等不可解の名の下に通稱し來れる、一種半病的の體質は、恐らくこの種中毒の範圍に出ざるものであらうと想像せらるるのである。

而して氏の自家中毒病說は、今日の自家中毒說とは、全く根本的に背反するものである。卽ち現在の醫學では心臟病は少數の例外を除いて、その大多數は繼發性(ゼクンデール)であるかに解釋せられてあるが、岸本說によれば心臟病は原發性(プリメール)とされてゐる。——つまり換言すれば、衆說では諸器官が病んで、病を心臟に及ぼすと云ふのであるが、岸本說では、心臟が先づ病む結果として、諸器官もまた從つてその影響を受け病的症狀を呈すと云ふのであ

る。——これ實に翁の自家中毒說の骨子である。つまり自家中毒によつて、心臟神經が冒されて心臟が肥大し、其結果として諸病を誘發すると云ふのである。

かくて氏は蛋白過多な從來の營養學說に反對して、菜食を主張するので、この點に於て石塚左玄氏の提唱せる食療法に科學的根據を與へたものと云ふべきである。卽ち氏はフォイト式の營養學を根柢的に覆した世界的先驅者で、デンマルクのヒンドヘーデの新營養學や、アメリカのエール大學敎授チッテンデンや、カーネギー營養研究所長、ベニヂクト敎授等の新說に十數年を先驅し、更により科學的な根據に立つてゐる。——然るに日本の醫界には不思議な事には此等の西洋人の說をかつぎまはつてゐる人達が多く、自國に更に彼等よりも優れたる學者のあるを知らず、知つても默殺してゐる事は、依然たる西洋崇拜でまことに悲しき事である。

ただ氏の說の今日に於ける唯一の弱點は、氏の所謂自家中毒を惹起する毒物

の化學的構成が闡明されず、且つそれによつて病理解剖的研究が不足せる點であつて、この點に對して病理學者中の或者は、氏を慢然として主觀を述ぶる人とか、或はヒポテーゼと云ふが、こは罵らんがために罵る人である。予は氏の研究がまだその毒物の化學構成を突きとめないからとて、その偉大なる創見たるの價値は傷けられぬと信ずる。

上記系統の諸病が主として肉食過多に原回する以上、その毒物は腐肉より生ずるプトマイン(屍毒)に比すべきものであるが、胃腸内にあつては、しかく單純なるを得ず、更に之より微弱稀薄なる毒を生ずる點に於て、毒素の發見が益々困難なる譯である。然し氏はなほ此非難に對抗すべく、七十の老軀をもつて研究を續けられてゐるが、思ふにその中毒を惹起する毒物たるや、頗る稀薄微量であり、永年中に累積して中毒症を起すものなるが故に、化學的には摘出に困難であり、なかなかに今日の實驗主義者に滿足を與へられぬが、必ずや氏の

推定は的中より遠きものであるまい。その中毒素の發見は單に時間の問題である。而してその光榮が近き將來であるとし、予は茲に漢方醫學の近代化の一例證として紹介讃美をなし置く次第である。

第三篇　漢方調劑の理論

第七章　洋方藥と漢方藥の效果の優劣

一、　洋方と漢方の根本的相違

漢方醫術と洋方醫術の臨床的效果を比較して、漢方の驚くべき優秀なる理由は、一は既に述べたる如く、診斷法が異り、洋方が病名に對して投藥するに反し、漢方は症狀に對して投藥する、投藥精神の根本的相違にあるが、第二の理由としては、藥劑調合上の根本精神が異るにもよること多大なるは言をまたぬ事である。

然らば洋方と漢方との、處方上の根本的相違は何であらうか。

凡そ藥物の原料は、洋の東西と時の古今を問はず、動物、植物、鑛物の三つより外はなく、漢醫方は比較的に多くの原料を草根木皮、卽ち植物界にとり、

之を主體として之に動物性と鑛物性の藥物を配合して、その協力によつて病を治せんとし、洋方は鑛物性の藥物を主體とし之に植物性藥物を加味するが、動物質に至つては、一二の特殊の場合の外は配合されず、動物質は獨立的に使用される。而もそれは極く近年の事であり、少し昔は知られてゐなかつた。

この配合の割合を、和田啓十郎氏は二十年前に左の如く概算してゐる。

漢方	植物 七	鑛物 二	動物 一
洋方	植物 六	鑛物 四	動物 〇

而して洋方の主義とする處は、主藥一物の作用によつて病に當らんとし、然も動植物性のものは、その原料から純分のみを抽出して用ひんとする傾向がある。——この一物の作用によつて病を治せんとするのを、單味主義または一味主義と云ひ、更にその純分を抽出して用ふるのをば、純味又は純分主義と云ふのである。

之に反し漢方は動植物をば原料のまゝで用ふるので、この原料的な自然の儘の藥をば『生藥』と云ふのである。漢方はかく生藥主義であり、而も之等の生藥をば、一味的に使用するのでなくて、幾通りも幾通りも、實に雜多に混じて用ふるので、之を複味主義と云ふのである。卽ち漢方は生藥的複味主義である。

漢方と洋方の方劑は、かくの如くに異るのであるが、今これ等の方劑の優劣を論ぜんとするに當り、問題は自然に次の如くに分類せられるのである。

イ、生藥と純分藥の優劣

ロ、一味主義と複味主義の優劣

更に之に附加するに、漢方々劑の經驗主義と、洋方々劑の實驗主義とを併せ論じ、以て洋漢の方劑の優劣を決定せねばならぬ。

洋漢の方劑の優劣を理論的に決定するに先ち、予は自ら結論を玆に述べて置くのを便利と思ふ。——予の到達し得たる結論によれば、漢方の洋方に優れる

は論をまたぬ。こは理論的吟味に先立つ處の事實の問題である。——事實ありて理論これに從ふ。——洋漢方劑の優劣を理論的に吟味すると云ふも、要するに事實を如何に理論的に取扱ふかの問題である。故に優劣の批判は、先づ結論が事實として横つてゐる事から出發する。

二、生藥主義と純分主義の優劣

生藥の效果否定は自己撞著

漢方々劑は生藥の使用を基礎とするが、漢方を優れてゐるなど云ふと、しばしば洋醫が頭から、草根木皮の樣な野蠻な物が、きく筈がないと笑ふ。——然しこれ等の言をなす者は如何にも思想が矛盾撞著を極めてゐるもので、彼等が今日自ら使つてゐる藥が、モルヒネにしろキニネーニしろ、カンフオルにしろコカインにしろ、多くは草根木皮を原料としその『純分』とか云ふものを抽出し

たに外ならぬ事を忘れたものである。彼等が草根木皮を笑ふ事は、無效なる物より有效な成分が取れると云ふ、無より有を生ずるの論理的矛盾である。

この道理の爾く自明なるに係らず、漢藥に對する洋醫の輕蔑は、牢乎として拔くべからざる物がある、誠に生藥に對する冷笑は、盲目的、非科學的、自家撞著的ではあるが、苟も信ぜられてゐる以上は一個の時代力である。

草根木皮に對する輕蔑が、那邊より生じたか。思ふに純分のみを抽出した藥と云へば、原料の生藥より有難く思はれるのは止むを得ぬ。然もそれを複合的に配劑するのでなく、一味的に使用して良いと云ふ時、ますます有難さが加らざるを得ぬであらう。——若し生藥と純分藥が效果に於て同じであるならば、純分藥の方が優れてゐるのは論をまたないでも判つたことである。——然し生藥に對する輕蔑を、外見から持ち來すは素人のなすべきこと、苟も醫家たる以上は、その優劣を外見でなしに、結果より斷ぜねばならぬが、さてさうも行か

ぬものと見える。

生藥輕蔑の起原

では生藥の使用は漢方に限られたもので、西洋の藥方には之なきかと云ふに大に然らずで、凡そ昔は藥と云へば、鑛物性のものを除いて植物性のものは、洋の東西を問はず共に生藥を用ひたものである。これ化學が發達してゐなかつたための當然の事である。わが國は豐臣の時代にポルトガル、スペイン宣教師の來朝と共に西洋の醫術に接したので、ことに德川の初期にエンゲルベルト、ケムフエルが來たことによつて、日本の醫界は、多少の衝動を受けたけれど、當時のヨーロッパの醫術と雖も、みな生藥を主としてゐたので、日本の方劑に對する影響は、從來の本草綱目にないところの、若干の藥物を敎へられたに過ぎなかつたので、依然として漢方が全盛にあつたのである。

然るに德川時代の末期に至つて、特にオランダ人と密接な關係を保つやうに

なつてから、ヨーロッパ流の醫術に心醉する者が續出し、遂に明治になつては國法によつてヨーロッパの醫術を採用し、漢方が全く禁止された樣な非運に陷つたので、誠に馬鹿なことで時代として止むを得ぬことであつた。

洋方醫學を採用するに至つた心理的經過は、既に本論の冒頭に於て說明した通りであるが、それは解剖に對する驚きと藥物の純分的美麗に對する驚きであつた。而してこの藥物の少量美麗は、何時から起つたかと云ふに、十九世紀の始めに擡頭した、近世化學に根を置いてゐる。卽ちゼルチユルネル氏のモルフヒン發見を動機として、從來效力が顯著なりと知られてゐた生藥から、陸續として其效力の代表要素と信ぜらるる單一成分を抽出して使用する事になつた。

化學の能力に對する過信、純分藥に對する盲目的尊敬は、いつとなしに時代力を形成し、製藥學の如きは其最終の目的に於て生藥の有效成分を抽出するにあると見做され、生藥を野蠻視する風が滔々たる勢をなした。而して生藥の放

薬は疾病をして益〻難治たらしめ、且つ社會の工業的發達は都市と工場生活より惹起せらるゝ文明病を益增加し、この原因は重ねて藥劑の需要を增加した。この需要に應ずるために、大製藥工場が無數に設立され、化學的方法によつて純分藥は抽出されて、工業の一大分野を形成した。

製藥工場の叢出は、一見あたかも醫學と藥學の成功を誇るが如く思はれ、世人も醫家もかく考へた。然るに焉ぞ知らん醫術は益〻退歩し、病者のみ徒らに增加してゐたのである。然も人々は診斷學上に於ける進歩を以て、治療醫學の發達と誤解してゐたのである。

かくの如く純分藥品の流行するに至つた起原は、實に十九世紀の始めに過ぎず、從つて生藥が輕蔑さるゝに至つて、日尙ほ淺いのである。——故に生藥の輕蔑と純分藥の尊敬とは誠に經驗の淺い物である。生藥果して效なければ、如何にして十九世紀の初頭まで勢力を維持するを得たであらうか。

人類が地上にあつて此方、生藥が主として用ひられて來て居り、論より證據に病を治して來たのである。生藥を輕蔑するのは、科學上最も大切な「論より證據」と云ふ事を忘れた者である。——而してなほ輕卒な事には、新に藥局方を編纂するに當り、從來漢方で用ひたもので、十分使用にたへ或は却つて優るとも劣らぬものがあつても之を棄ててワザワザ彼の國の品を入るるに至つた事である。例へば黃蓮の代りにコロムボ根を、川芎や當歸の代りにアンゲリカ根を遠志の代りにゼネガ根を、唐大黃の代りにトルコ大黃、烏頭に代りにアコニネット根を採用した如き皆然りである。——而して漢方的處方を採用するにしても大黃の如きは重質大黃を用ひては效く、唐大黃を使はねばならぬ。產地によつて成分も自ら異るのである。

純分は果して抽出できるか

草根木皮を讃美し、洋醫の生藥輕蔑が自家撞著である事を指摘すると、彼等

は定つて「然らば草根木皮を分析し、其有效成分を抽して使用を簡ならしむるに如かず」と遁辭を云ふのが常である。

然し現代の化學の程度は、果して生藥の有效成分を抽出し得るまでに發達してゐるであらうか。之れ甚だ疑問である。現に漢方では解熱藥として、昔から犀角、羚羊角、ウニコールの類を使用してゐるが、その有效成分が何たるかは現代の化學力を以てしては、全く知り得ないのである。これ等の角劑は地龍(蚯蚓)によつて驅熱し得ざる時、常に使用され居る物である。然し洋流醫家はこれ等の角劑の驅熱成分が、化學的に抽出し得ざるを理由として、成分が無いからきく筈がないと云ふが、洋方で用ひてゐる、コロシント實の成分の如きは全く不明であるが、峻下劑として現に使用されてゐるではないか。

分析しても成分が見出し得ぬのは、成分が無いのではなくて、見出せぬのである。見出せぬと無いのとを混同するのは甚だしい謬見と云はねばならぬ。論

より證據に、角劑が驅熱作用を有するを如何とするか。角劑の有效成分が不明なるを以て、有效成分なしと斷定するは、現代の化學を餘りに萬能視する物である。

現代の化學の程度は、決して完全ではない。科學は常に過渡的な物である。化學的有效成分を抽出し得ざる事を以て、これ無しと斷ずるは、化學の不完全を忘れたる暴論で、恰も病源不明の疾患を病に非ずと云ひ、目に見えぬ引力を否定せんとするに等しい。

一歩を讓り、現代化學の分析能力を、假りに完全なりとし更に問題を一歩進めて、疑問は更に續出して來る。

生藥が效を奏するは、果して其中に含有されてゐる單一の成分に基くか、或は數個の成分の連合によつて然るか。ヂウレチンの如き强力なる利尿劑が、時によつては全く無效となる樣な事を往々耳にするは何故か。吐根に於てもエメ

チンを純粹にすれば、する程效力が薄くなるのは何故か。こゝに滑稽なる一例をあぐるならば、日本藥局方の鹽酸エメチンは、方法が不完全なために純粹品ではなく、吐根のチェフェリンを含有してゐるがために、卽ちそれだけ生藥に近いために、西洋の上等な純粹品よりも、藥效が優つてゐるといふ事である。

一體そもそも有效成分と云ふ物は、獨立して存在し得るものか、また有效成分とは、そもそも何を意味するのか。——予等は純分藥と生藥の效果を、實際に比較して、有效成分なる觀念その物に、懷疑の念を以て向はねばならぬのである。

生藥の效力より推すに、有效成分なる物は全成分の全結合による物だと云ひたいのである。果して然るとすれば目下の處、漢方的煮沸かエキスによるの外はない。——現今の化學的操作は、未だ動植物の全成分を分離抽出するには完全ではないのである。現代の化學的操作は、かなり精細にはなつて來てゐるが、

特殊の場合に都合の良い方法を、經驗的に案出するに過ぎず、普遍的な方法なる物が存在しないのである。

故に甲なる物質を、なるべく完全に抽出しようとすれば、自然に甲乙丙等々の物質を犧牲にして、顧みないのが普通であり、從つて大切である處の他の成分を失ふ事になり、單味藥が有效成分の主體でありながら、實際にはきかぬと云ふ事が起る。——之は或る物質が粗製品或は原植物中に存する時と、それを化學的に純粹にした時とは、その物理的性質を異にするのも、確かにその理由の一であらうと思ふ。その著明なる點は溶解度を減少し、場合によると全く不溶解になつてしまふのである。

この原因は多分、操作のために變化する場合もあらうし、また夾雜物が混じて居たがために可溶性であつたのが、純品となつて却つて可溶性を失ふ場合もあらう。現にカフェインの如きは、安息香酸ナトリウム、サリチル酸ナトリウ

ムと混ずると大に可溶性を增して來る。

「恐らく生藥の驚くべき效力は其中に含まれてゐる不明の粘液、糖分、有機酸のために所謂有效成分の溶解度を增し、更にその吸收を容易ならしむるのであるまいか。

純分藥讃美の迷信

純分藥と生藥の效果を、感情や机上からでなしに、臨床的效果より、論より證據的に比較する時は、純分藥は到底、生藥の敵であり得ない。事實は何よりも雄辯である。

純分藥を理想視するは、全く一の迷信に外ならぬ。近代人は科學の勃興によつて迷信から解放されずに、所謂迷信に代るに科學に對する迷信を以てした。凡そ物には限度がある。限度を超ゆる時、必ず迷信となる。書を讀んで悉く之を迷信すれば書なきに如かずと、科學また然りである。科學をして眞に科學たらしむる物は、反省的である事、懷疑的である事に外ならぬ。

純分藥は所謂純分であるために、必要な全要素が抽出されて居らず、從つて屢無效な事が多く、多くの場合は生藥ほどにきかぬ。また純分藥は生藥中に存してゐた、或必要成分の缺如のために、卽ち餘りに純分的であり過ぎるために屢中毒の原因となる。——凡そ純分藥は殆んど多くの場合、その極量が生藥より非常に減ずるものであつて、痙攣刺痛等の急劇の症狀を對症的に一時頓挫せしめるには屢々奏效するが、二三服にて治癒し得ざる長期の服藥を要すべき慢性病に對しては殆んど奏效しない。

純分藥を長期に涉つて服藥する時は、或は胃腸を害して飲食の缺乏を來さしめ、或は血管系統に或は神經系統に對して中毒作用を起し、煩悶痛苦を增し、身體を益々虛憊せしむるに至る。甚だしきに至つては、病によつて死せずして、藥によつて死する場合すら有るのである。

之に反し漢藥は、西洋流の藥物とはその趣を異にし、幾月服用するも副作用や中毒の恐れなきのみならず、餘病を併發する恐れなく、長期の服用によつて病毒が漸時に除かれ飲食益々進み、遂に治癒するのである。漢藥は長期の服用に適し中毒の恐れがないから、洋醫の方法では外科的手術や洗滌の如き法を借つても、遂に癒えぬ痼疾が、良く漢藥の内服のみで治癒するのである。純分藥は決して理想的な藥ではない。

單味藥に對する輓近の反動

純分藥を以て理想視する人は、藥效を實地に就て比較する能力を缺いてゐる人か、或は生藥が無效なりと云ふ今日では既に時代遲れである偏見に囚はれてゐる人達である。純分藥に對する迷信的崇拜は、獨り我國の醫界のみが陷つた過誤ではなく、實は全世界の醫學界を擧げて陷つた、時代の迷信に外ならなかつた。——而して此迷信たるや學術の發達に避くべからざる必然の過渡的階梯

であつたのである。

然し誤れる主義は、何時までも其權威を維持して居られない。自然に時代の推移と運命を共にせねばならぬ。漸く人々は純分藥の效果を疑ひ出した。古き眞理は再び墓穴から呼び戻されねばならぬ。人々は知つた——如何に近世の偉大なる化學の力を以てしても、また如何に嚴重なる藥理的試驗の效果を以てしても、要するに純分藥は生藥の全效を代表する事が出來ぬと云ふ事を。

かくて舊醫學の殘骸として輕蔑の對象であつた漢藥は、今や最新知識の尊敬の對象と變じて來た。漢方を輕蔑する事は、新しがる事ではなくて、むしろ時代遲れとなつてしまつた。世界の全醫學界に漢方的精神は、澎湃として起りつつあるのである。——ただ人々はまだ漢方を復活する事を恥づる一種の時代的惰力に引きずられてゐて、實は敢然と自ら叫ばないだけで、諸方面の大家によつて、それぞれ祕かに復活されつつある。

製藥上に於けるこの精神の復活は、純分的化學藥品主義に反する複合藥主義となつて出現して來た。個々の藥品の藥理由試驗では、所要の成績を擧げ得なくても、その混合によつては所要の目的が達せられると云ふ事が分つた。これあたかも物理學上に於て、方向を異にした二つの力は、一の合力として其對角線的力として現はれると同じ理である。

漢方はかうした原理を十分に知らなかつたが、これを實地の上から經驗的に知つてゐたので、漢方では一味の藥品を使用する事は、全くないのであつて、場合によると煩はしい位に、多味の藥品を混合して使用してゐるのである。

この點に着眼して製造されてゐる藥品の代表的なものは、阿片製劑とヂキタリス製品であつて、その他吐根に於てもエメチンを純粹にすればする程效力が薄く、常に若干のツェフェリンの存在が必要であり、近時流行のシノメニンもヂヴェルヂンを混じて始めて目的の效果をあげ得るといふ事が知られた。

然しこの純分複合主義は何時まで續くか。之は純分一味より良いに定つてゐるが、果して生藥以上に效果があるであらうか。これは斷定の限りでないが、思ふに恐らくこの純分的複合主義を以てするも生藥に及びがたく、從つて醫學は漸次に漢方的古醫道に向つて、復活して行くのではあるまいか。

また次に復合主義、或は生藥主義が新方面に開拓せられるであらう處の、一種の豫想を語るならば、食鹽注射の如きは思ふに恐らく、今日のドイツ學派の人達が好んで用ふる淡水や蒸溜水に、可及的に純粹なる食鹽を溶解した生理的食鹽水に代ふる、或は清淨なる海水をとつて、濾過滅菌して之を七八倍內外に稀薄し、以て注射に供するのが大自然の原理に合してゐるのではあるまいか。

——何となればリンゲルがカルシユーム療法を創始した基礎をなしたところの發見によれば、海草をば淡水や蒸溜水に投じたるに、その海草はふくれ上つて細胞の分裂を生じた。それで更に淡水や蒸海水に四パーセントの純食鹽を加へ

ても、同じ現象が起きたが、之に微量のカルシユームを加へると異常がなかつた。これカルシユーム療法の基礎をなしたのである。

ところで動物も植物も共に身體内には六パーセント乃至七パーセント半の海水と同樣の化學的構成を持つ生理的鹽水を持つが、之に對してドイツ式の生理的食鹽水と潛稱する物を注射するは、細胞分裂をこそ起せ決して有益なる理由がない。むしろ有害なものと推斷せらるる。——之に反しドイツ學派から見たならば不純であつて、生理的自然の配合から見たならば類似な海水をこそ用ふるは、まさに醫哲學に合致するものであるまいか。

また酸素吸入の如きも過度にわたる時は、人工肺炎を起す事はオリバー氏の試驗で明かである。また科學が夢想して幾度が試みた化學的食物も、彼等の妻君が作つた料理にどうしても及び得ず、人工食物は不可能と定つたではないか——これ等の事實より推斷して、予は醫學の大道は大自然主義にあることを叫

ばんと欲するものである。かのヂフテリアの血清療法の如きは、自然の治療作用の模倣として、予の大に構成せんとする處である。予の自然主義を以て、徒らに保守主義、頑迷主義となす勿れ。予は自然に反する治療を排斥せんと欲するのみである。

十九世紀以後、ひとり日本の醫學のみならず、世界の治療醫學は、實に殆んど進歩をなさずして、却つて單味主義の科學の假面をかぶれる迷信に禍されて墮落して來たのではあるまいか。イギリス醫學然り、フランス醫學然り——而してその迷信の最上級にあるものこそドイツ醫學ではなかつたか。——予はこれ等の疑門を改めて醫家の前に呈して、大反省を乞はんとするものである。ルソーの自然に歸れと云ふ言葉は、醫學のためにも眞理ではあるまいか。

三、一味主義と複味主義の優劣

一味主義は原始、複味主義は文明

醫術の發達の歴史に徴するに、第一期の發達は病を咒うて治せんとした巫祝時代で、第二期は藥物が發見されて、何品は何病に效果ありと稱し、一味の藥效によつて病を治せんとした一味藥時代で、第三期は藥物に各々協力したり、相殺したりする性質あるを知つて、各種の性の合する物を組合せた藥方組織時代である。

人類の發見は常に增加して行くが、一味にて病を治せんとする狀態は、今日もなほあり、民間藥は卽ちそれである。民間藥の醫藥に及ばざるは、一味主義なる點にあるので、その藥效をして益々增大せしむる他の調劑を加味せざるがためである。

元來、醫藥品(特に著明なる)の發見者は、その地理的關係から云つてもヨーロッパ人ではない。ヨーロッパの山林はモミやツガやブナの樣な落葉濶葉樹林

で、その原野と云ふものは、殆んど牧草のみと云つて良いほどで、ヨーロッパ特產の藥品と云へば、ヂギタリスとゲンチアナ位のものであらう。

自然人はある種の直感と云ふ者を持つてゐる。犬や猫が藥草を知つてゐると等しく、自然人は直感をもつてをり、而して此等の原始人は先づ熱帶の食物の豐寅な處に繁殖したが、それ等の土地は疾病の發生條件を具へてゐる不健康地たると共に、またこれ等の疾病を醫する藥草の產地であつた。原始人はこれ等の熱帶や亞熱帶の豐寅なる植物の中から、直感によつて靈藥を發見したのである。卽ち南アメリカに於てはキナ、コカの發見となり、蒙古やチベットでは大黃を知り、エシプト小アジア、アラビヤでは阿片を發見し、支那に於ては所謂、神農が百草を嘗むると云ふ傳說から、ついに本草綱目に擧げられた千八百種の藥品を發見したのである。

かくの如く藥草の發見は、自然人に負ふところが多く、從つてこれ等の自然

人が永年に渉つて積み重ねた經驗は尊むべきものであり、之に反しヨーロッパ人は藥物に對する經驗が淺く、從つて彼等はこの方面の知識を缺いてゐるのである。故に彼等の淺薄な經驗を眞似るのは、盲目的な西洋讃美に外ならず、彼より敎はるどころか、經驗に於て我は彼よりも數段の年長者である。

我等の祖先が數千年に渉つて、經驗に經驗を重ね、淘汰に淘汰を重ねて來た藥品や藥方を盡く土塊視すると云ふ事は實に無謀と云はうか迷信と云はうか喩ふべき言葉すらないのである。——現にヨーロッパは今日やつと、我等の祖先が、夙くの昔に卒業した一味藥時代を卒業して、やつと複味主義の門口に足先を踏み入れんとしてゐるに外ならぬではないか。——ヨーロッパは漸く一味藥品の效力が微弱であつて、透徹の力に淺く、その連用は時に却つて副作用なる忌むべき徵候を來すことを知り出したのである。

此點より見る時は、ドイツ式の調劑は、最も一味的色彩の强いもので、野蠻

的調劑の骨頂たるを失はぬもので、イギリス式の多味派はドイツ式よりも遙かに高等なものである。然るに日本は、ヨーロッパでの最も未開な調劑法を輸入して得々たるのであつた。

西洋でも一味主義よりも、複合主義の方が良いと云ふ事を無意識裡に實は實行してゐるので、患者に水藥、散藥、丸藥の數種を投ずるによつても判る。——漢方はこの別々に一味式を投ずる代りに、同時に此等を投ずる方法を、自然的に經驗によつて會得したのであつて、洋方自身すら暗默中に、多味式ならざるべからざる事を知つてゐるので、實はまだそれが本當の自覺や意識に、上らぬ處に彼の此方面に於ける非進步の原因があるのである。遠からざる中にヨーロッパも、一味的純味的迷信から覺めて、複合の原理へと漸次に近よつて來るであらう。

複合主義の經驗は漢方が積む

かくて事實より推して、藥は生藥を用ひ、然も生藥を多味配合したものが、最も理想的な次第であるが、この生藥の多味配合による藥性と效力は、ひとり漢方にのみ積んでゐて、洋方には全くこれなき處である。

近來、洋方醫家の中で、漢藥の各種の性能を研究してゐる者があり、ドイツなどでしきりにやり始めた樣であるが、みなその生藥の一種づつの藥性と、その生理的作用や醫治的效果を論斷するに止つてゐて、未だ生藥相互の關係を明かにして生藥の複合的作用、即ち生藥の合成力の方面の研究は、少しもなされて居らぬ。——つまり漢方々劑の基本原理は、未だ全く晰明されておらぬ。

之に反し漢方醫書に於ては、秩序だとか系統だとか理論と云ふものが、西洋的な形式の下に整然とはしてゐないが、如何なる病に何が效き、如何なる病に如何なる藥を合すれば如何なる效あるかが、組織的に記載されてゐる。——故に予は此等を一の近代的系統に分類配列し、更に生藥化學なる一新部門を創始

するのが、今後の諸君の使命であらうと感ずる次第である。

洋方醫學の藥效に對する研究は、單味藥としては、誠に周到なる研究を經てゐるけれど、二物以上を配合して、如何にその作用に變化を及ぼすかは深く研究されてをらぬ。然もこれ甚だ藥物化學上の大問題であり、一寸した一種のぬきさしによつて、全體に大變化を及ぼすものである。

例へば「半夏」に配するに柴胡や人參を以てすれば、鎭嘔劑となり、之に反して五味子や細辛などを以てすれば鎭咳劑に變ずるのである。また「巴豆」に配するに桔梗や杏仁等を以てすれば峻吐劑となり、之に反して大黃と輕粉を以てすれば峻下劑に變ずるのである。この故に發汗の劑は陽藥を得て、その效は益々確實となり、通利の劑は沈降藥を得て、益々其の力を深達するのである。——これ等の微妙な作用が藥物の全般に涉つてあるのである。

故に漢方醫たらんとする者は、一味藥の性質を知つてゐても、藥物相互の關

係を知悉するに非ざれば、以て藥效の全力を運用することが出來ぬのである。漢方を原始的だなどと思つたら、飛んでもない事である。

また漢方では、附子だとか烏頭だとか巴豆と云ふ毒藥を、しきりに用ひ、然もそれを洋方ならば極量として恐るる死線を越えて用ひ、然も他藥の複合混用によつて、人間に對する死を免かれしめ、ひとり毒物を病原にのみ作用せしむるが如き方法は洋醫方から見たならば、單に驚くの外はないのである。これ等の毒物を極量以上に使用して、病菌にのみ働き人體に害なき樣に働かせるところ、實に醫術の奥堂に達せるものである。

第八章　藥物の動物試驗の價値

漢方を非難する人達はよく、漢方が經驗醫學であつて、實驗醫學でないと云ふ事を口にするが、頗る奇妙な說と說はねばならぬ。何となれば經驗と云ふ事

は、とりも直さず實驗と云ふ事に外ならぬからである。——そもそも今日、動物試驗が多く行はれるに至つた原因は、長期の試驗結果たる「經驗」をば、短時日の間に達成せんとするのであつて、經驗の模倣に外ならぬ。卽ち實驗とは意識的なる短時日の經驗であつて經驗とは不意識に行はれた實驗である。この事を忘れて、經驗醫學を輕蔑し、實驗醫學のみを推賞せんとする者は、實驗とは何か、經驗とは何かと云ふ事を忘れたる人の言葉と見るより外はない。

予は思ふに、漢方は經驗醫學なるが故に輕蔑さるべきものでなくて、むしろ經驗醫學なる故にこそ尊むべきものであると。——何故に然か云ふかといへばそもそも動物試驗なるものは、動物に對して行つた處のもので、人體に對して行つた處の物でないからである。

近頃の醫學界の趨勢を見るに、動物試驗の全盛時代で、動物試驗によらぬ業績は殆んど顧るに足らざる者の如く思はれてゐる有樣である。なるほど動物試

驗が醫學の進歩に向つて多大の貢献をなしたこと、現になしつつあることは固より爭ふことの出來ぬ事實であるが、この動物試驗も今日の程度では、漢方の經驗主義に及ばざる事が遠い。何となれば論より證據に動物試驗によつて好成績をあげたりと稱する物も、人體に應用しては價値なく、二三年の中にきれいに忘れられてしまふ物が多く、漢方の古くしていよいよ尊きとは雲泥の差異であるから。

動物試驗は果して左樣信ぜられてゐる程に價値があるものであらうか。而して之は特に今日の如く、病理解剖や臨床的觀察や研究を第二第三の位置において輕んじてゐる時にとつて、意外の錯誤を招くものとして反省してみる必要があるのである。

動物試驗に對する根本の疑問は、動物に就て認め得たる事實が、人間の生理及び病理に對して、如何程の意義と價値を有するかの問題である。

身體の構造の點に就ては、高等動物と人間との間には、それほど著しい差別のあるものでなく、殊に人間に近い猿の如き動物は、家兎や鳥類に比して著しく人間に類似せる構造である事は、誰も知つてゐる事であり、人間と動物の體制上の差異は動物が人間に近くなるに從ひ、換言すれば進化の度が高くなるに從ひ、いよいよ少くなるのであるが、之に反して身體の諸機能に至つては、人間と動物の間に甚だしい差異がある。

これは身體の諸機能なるものは、動物の發育階級よりも、むしろ外界に對する適應及び之に基因する體制の變化によつて差異を生ずるものだからである。例へば白鼠や家鼠や犬は少しも汗腺を持つてをらぬ。然るに猫はただその脚の無毛部に於て、豚はその鼻に於て、猿は手掌と足蹠と鼻部に於て、僅かに汗腺を持つてゐるに過ぎぬ。

之に反して人間は、皮膚の全體、至るところに汗腺を有してをり、人間が疾

病にかゝる時は、多くの場合に汗腺より病毒を排泄せんとして熱發を伴ふ。漢方の發汗法はこの人間の生理作用に乘じたもので、最も基本的な治療法であるが、この簡易正確なる發汗法を動物試驗によつて達成せんとして如何の得る所があるか。——動物は汗腺の發達が、皆無か或は僅少なる故、人間が病毒を汗腺より排泄せんとすると同樣に別個の特殊な生理作用あるべく、從つてこの機能ある動物によつて得たる實驗方法は、その方面の機能に於て動物に劣る人間には適用し難い譯である。

また消化機能に於ても、各動物の間にはそれぞれの差異がある。たとへば常識的に考へれば、猿の消化機能は最も人間に近くあるべきであるに、實際は然らずして、却つて犬や豚が人間の消化機能に類似してゐるのである。また體制上の僅微な差異のために、生理的現象に著しい相違を來すことがある。その一例は馬に就て見らるる處で、馬は食道の下部に於て、縱徑の筋纖維が他の經過

をとり、其收縮する際には噴門を閉鎖する故、決して嘔吐を來すことがない。——故に漢方の吐法や峻下法は動物試驗の成績を以ては、直ちに人間に應用する譯にはゆかぬのである。

また病理的機轉の上に於ても、顯著なる差異があることは病原菌に對する感受性の難易に徵しても明かであつて、動物に傳染せぬ病に人間が罹つたり、また人間を犯さぬ病に動物が犯さるる事のあるのは、專門家のみな知つてゐる事である。又化學的毒物に於ても之と同樣の關係があることは、アトロヒネが多くの草食動物に無害なる一事を見ても之を知ることが出來る。更にまた同じ草食動物でも、毒物がそれぞれ異つてをり、馬大黃なる植物の如きは、馬が之を食ふ時は必ず下痢を起し、甚だしきは死に至るが、之は家兎が大なる好物であつて、之を用ひて飼育する事が出來るのである。瞳孔收縮藥たるピロルカルピンの如き毒素は人に對しては〇、〇〇〇五の皮下注射によつて既に唾液の分泌を

起し、〇、〇二に至つては幾多の危險症狀を呈するに、馬に至つては、一ポンドの如き多量を用ひて緩下劑になる程度である。之と反對作用ある瞳孔散大藥のアトロヒネを含有する莨菪葉では兎が飼用できる。またバクチノキの葉は多量の青酸を含有し、之をしぼりて一二滴用ふれば、良く小兒の痙攣を治するが、若しあやまつて多量に與ふれば死に至る。然るに之れは九州では一名「牛肥やし」と云ふて牛に與へて肥滿せしむる飼料となつてゐる。

以上の如く、動物と人間とは生理機能を異にし、彼に實驗して好成績なるからとて、我に用ひて直ちに好成績なるとは云はれないのである。クラウデ・ベルナルドは生活現象に三種の要素を區別すべき事を說き、一はあらゆる生物に共通せる生活組織の性質、他は各種の動物に於ける特殊の解剖及び生理的性質の原因たる體制上のメハニスムスであるとしたが、各生物に共通普遍せる生活組織に就ての動物試驗ならば、その成績を直ちに一般物及び人間の上にも適用

することが出來るが、之に反して各動物特殊なる體制に基く性質に關する試驗にあつては、その成績を他に適用するに當つては、その體制の相類するや否やを顧みねばならぬ。

然し一歩を進めて論じて見ると、各動物に共通せる生活組織の性質に就ての試驗成績でも、之をあらゆる動物の上に適用することが出來ぬ事もある。例へば筋肉の收縮性の如きは何れの動物にも共通せる性質であるが、然しその收縮の持續の長さと、血液循環との關係なき事は、溫血動物よりも冷血動物の方が甚だ大である。蛙の筋肉は血管との關係を絕つて體外に切り出しても、數時間は收縮する性質を保有し、また心臟の如きも之を摘出した後も永く定調的運動を續けてゐるが、高等動物の筋肉や心臟は決してコンナ現象を認むる事が出來ぬ。されば一般共通の組織に關する試驗成績でも、之を生物全體に適用できぬ事がある。

以上說くが如く、動物試驗の成績は、人間の生理及び病理に對しては、蓋然的であつて、決して同一のものとして當てはめる事が出來ない。クレールの說くところによれば、循環、呼吸、排尿に關する動物試驗は、最も蓋然的なものであるが、消化機能の如きものになると、外界に對する適應のために、各動物間に差異があり、試驗成績は價値が少く、神經系及び新陳代謝の試驗に至つては、最も不確實であるとの事である。

事情以上の如くであるから、洋方の所謂藥物の動物試驗なるものは、その効果は信ぜられてゐる程でなく、頗る疑はしいのである。之に反し漢方の治療法は、直接に人間に就て經驗に經驗を重ねて來たもので、實驗の極度であり最も價値ある尊ぶべきものなのである。されば漢方をば實驗醫學なりとて輕蔑せんとする者は、醫學に於て何を尊敬すべきかと云ふ事を知らぬ、價値轉倒の錯覺者に外ならぬのである。

その他の二三點に對する考察

漢藥と洋藥の比較は大體、以上であらましついたが、更に二三の事項に就て述べて置きたい。

最近臓器療法の一進歩として、糖尿病の注射藥たるインシュリンが發見され一九二二年にノーベル賞が授與されたが、このインシュリンなどは漢方眼から見ると笑ふにたへぬ藥である。何となれば此藥を注射する時には、常に患者の血液檢査をやらねば危險で用ひられず、普通の醫者には用ひられぬといふ不便千萬なものであり、然もそれは注射をしてゐる間だけ糖の排出がなく、注射をやめれば直ぐに元にもどると云ふに至つては、少しも治療上の效果がない物である。

之に反し漢方藥は、簡單な內服にて用を辨じ、單に排糖が止まるばかりか、

服藥によつて永久的にその疾病を根治し得るのである。インシュリンの如きがノーベル賞なら、漢方療法は何であらうか。

カルチユム劑としては、洋方は燐酸石灰や炭酸石灰やクロールカルチウム等が使はれてゐるが、朝比奈教授の說によると、漢方では石膏卽ち硫酸カルチユムを使用して立派に效果を擧げており、また興奮劑としては、藥物學的にも多少の缺陷あるカンフォルなどよりも、漢方の麝香などが良いのではあるまいかとの事である。更に弱性で長期的興奮劑としては人蔘が最もよいのである。

今日は注射萬能の時代であるが、これも實に無謀な話で、注射は效果を目前に見る事の必要な、危急の場合に限り用ふべきものである。田村憲三教授の如きは、この注射萬能に對して、有力なる非難を加へてゐる者の一人である。思ふに、注射の如きを濫用すると、何時かその藥が體內にあつて、餘病の源となるのである。藥は人間に消化器管がある以上は、內服によつて藥を消化しつつ

病を治するのが、最も生理的な譯である。この故に內服藥は藥療の正道であると申さねばならぬ。

以上の理由より見ても野蠻と罵られる漢方藥は、實は最も進步したものであつて、最近は外國よりしきりに漢方の書籍を買ひしめに來てゐるのは、實にこれがためである。

第四篇　鍼灸術

第九章　鍼灸治療總論

一、鍼灸は世界無比の物理療法

古き眞理を甦生せしむるために

予の使命は、古き眞理でありながら、單にその言語的表現が古いために、あたかも古くして全く價値がないかの如く誤解され、世から葬られてゐる所のものをば、新しい言葉をもつて表現しなほして、それに新意義と新生命とを附與するにある。——卽ち新しい眞理を發見する事よりも、むしろ古い眞理を甦生せしめて、古い眞理を棄て去ることの危險から、社會を救はうといふのが予の願ひとする處である。つまり社會の群集心理的な無反省から來る逆淘汰を防いで、淘汰をして優勝劣敗の正道につかしめ、以て社會の實質を充實せしめんとするに外ならぬ。

故に予は新人ではなくして、むしろ舊人である。然り甚だしき舊人なるが故に、却つて新人の最も新人なるものである。――一年で枯死し、年々歲々、花新なる草花ではなくて、千年の壽を全うするところの松柏たるが故に、舊くして新しきものである。

この舊人たるを十分に自覺せる予は、以上に於て極めて概略ながら、漢方醫學の藥物治療に關する部門の要領を講述したが、更に進んで、いよいよ古くして、然もいよいよ驚くの外なき鍼灸治療の部門に、新解釋の筆を進めんと欲するものである、

然もこの筆を執らんとして、予は讀者に對して、あたかも奇蹟を說いて、その實在を信ぜよと强ひるが如き感なき能はぬものがある。蓋し思ふに、恐らく讀者は本章を讀むとも、始めは半信半疑であるべく、讀み行くに從つて、或は漸く予の言を信ずるに至るであらうから。

鍼灸は舊時代の遺物ではない

鍼灸の法たるや、世上これを見ること一個の迷信の如く、まぢないの如く、往昔、醫學が未だ發達せずして、治病の方法が極めて不完全であつた時代の遺物と考へてゐるが、思はざるも甚だしきもので、これはむしろ漢方の藥物治療の上にも坐すべき、世界無比の物理治療であり、嚴乎として明確なる法則の上に立つもので、その法則は研究すればするほど、その偉大に驚くの外なき「高等病理學」もしくは「高等生理學」である。

而してこの鍼灸の原理が敎へてゐる處の基礎的原理に照す時は、現代の生理學や病理學は、殆んどその根柢から顚覆せざるを得ないのである。卽ちその法則自身が近代生理學の批評であると共に、近代の生理解剖學も、その知識と經驗を積んでゆくうちには、何時かは鍼灸の基礎法則をなしてゐる所のものに到達するであらうとすら考へられる。――まことに現代の生理學や病理學は外見

的には甚だ發達してゐるやうであるが、その實質から考ふるときは、東洋醫學よりも文字通りに數千年(黄帝時代)遲れてゐると云はざるを得ぬ。鍼灸の學を伺ひ學びつつ、予は醫學は昔よりも發達したのであらうか、或は却つて衰へたのではあるまいかと疑はざるを得ないのである。

事實を如何するか

世にも迷信の極として、漢方の藥物療法よりも、更に野蠻にして更に古臭ある鍼灸を、予は何の根據あつて斯く讃美するかと云ふに、予は現に論より證據に、鍼灸の偉大なる效果を目擊しつつあり、醫家諸士及びに讀者諸士の求めに應じて、卽坐に奇蹟を御覽に入れる事が出來るからである。

繰返して云ふが如く、科學は論より證據の學である。實證の基礎に立つ學である。苟くも事實によつて裏書きせられぬならば、何の價値も權威もあるべきでない。——然り予は敢て予の言を疑はんとする者に向つて、鍼灸の實際を見

よと叫ぶものである。——まことに此言たるや傍若無人であつて、眼中に二十世紀の醫學の有らざるが如き感があらう。然り予は敢て現代の醫學を、眞の科學の名に於て、實證の名に於て侮辱せんと欲するものである。

予を罵るに狂人を以てしてよい、誇大妄想を以てしてよい。——さりながら事實は何物よりも雄辯であり、笑ふ者、罵る者は却つて地動說を嘲るの徒となるであらう。予は徒らに、毒舌と奇說によつて、世の耳を聳動しやうと云ふものではない。何時にても挑戰に應じ、實驗をお目に掛けて、論より證據にお得心の行く樣にしやうと云ふものである。衆人環視の中に於て、醫術の優劣の雌雄を決せん事を、神明に盟つて玆に公言するものである。

幸な事には醫學の道は、實證の學であつて、結果が目前に現はれ、正邪が直ちに決する事である。昔ガリレオはアリストテレスの落下の法則の誤謬を證明せんとして、ピサの斜塔から大小二個の砲彈を投下した事は、科學上のローマ

ンスとして今も歴史の中に輝いてゐる。――然りこのローマンスの如く、鍼灸の偉力をば、論より證據に示さんとするものである。

證明の材料として選ぶものは、治療に長時日を要する慢性的な疾病を除き、卽座に明快なる甲乙の結果の證明される物を選ぶのが便利である。

而してそれには、顏面神經痲痺で目や鼻や口の歪んでゐるのなどは最も面白く、一分間の中にその顏面の攣急をとつて、常人の顏にもどす事が出來、また神經性疾患のために足腰の立たぬ者も、同じく卽座に立つを得せしめ、また丹毒病や癰や疔にて患部の變色を腫脹せるものも、灸をすへてゐる中に、見る見るその變色と腫脹がとれ、睪丸炎にて睪丸の肥大せるものも、急性にて化膿しおらぬ限りは、見る見る中に縮少せしむることが出來る。――これ等は活動寫眞に撮影することが出來る、外見的に顯著なものであり、予は近き將來に於て、これ等を撮影實寫して、學會に發表せんと決心してゐる。

また活動寫眞に撮影できぬが、醫家と立合にて實地を示し得るものは、胃擴張、胃下垂症、子宮の後屈、前屈、左右屈、下垂症を卽座に鍼灸施術と同時に治し得るのである。この外に子宮痙攣や胃痙攣や盲腸炎や腎臟炎の如きは、卽効の驚くべきこと問題外である。

これ等の言をなす時は、醫學に通ぜる者ほど、予の言を信じないであらう。奇蹟の實在を强ひんとするものと罵るであらう。――然りその疑ひ、その罵倒は當然である。然し「論より證據」を何としやう。事實は何物よりも雄辯である。

或は予の言を信ずるに、聊か謙遜であつて「鍼灸をなせば或はそんな偶然の場合があるかも知れぬ」といふ人もあらう。さりながら世に偶然なるものが有り得やうか。科學は偶然を否定し、一切を必然の因果關係なりと主張する。しかも鍼灸が上記の諸病の一二を例外的に治したのならとにかく、これを百發百

中に忽然として治するのであるから、これを偶然の二字によつて片づける事が出來まい。若しかくの如きことを云ひ得るならば、太陽は毎日偶然に西山に傾きつつ、また毎日偶然に東天よりのぼると云はねばならぬのである。

鍼灸に名醫少し

かく云へば讀者は或は、予はかくかくの疾病に鍼灸を施せしも効果がなかつたとか、某鍼灸師についたが治療しなかつたと云ふであらう。——然しそれは鍼灸の無效によるのでなくて、鍼灸師の無能によるもので、眞の鍼灸師に非ずして、羊頭を掲げて狗肉を賣るの徒に過ぎぬのである。

それ鍼灸の法たるや、世界最高の醫書たる『十四經』に說かれおる『經絡』學と『經穴』によつて施術せねばならぬのであるが、この『十四經』なるものは、頗る難解の書であつて、良くこれに通曉し得るものが少く、ためにデタラメの處に鍼灸を施し、無效なる事が少くないのである。

現に今日、鍼灸師の資格試驗は、大正二年十一月に文部省が『經穴調査會』を設け、大正七年十二月に三宅、冨士川、大澤の三博士に盲啞學校の冨岡、吉田の兩教師が調査員となつて調査した『改正新孔穴』といふものによつてゐるが、これが既に『十四經』の何物たるかを無視した、めくら滅法の鍼灸法であつて、このやうなデタラメな標準によつて鍼灸師となつた者にかかるから、治療の功績があがる筈がないのである。ことに奇怪な事には、東京の鍼灸界に於ては、『十四經』の傳統をば鍼灸學より葬り去らんとしてゐる事で、その無暴たるや天を怒らすものである。故に今日の多くの鍼灸師の技術をもつて、鍼灸の効、無効を論難する事は出來ぬのである。

然らば今日その『十四經』の神境に到達してゐる人があるであらうか。然りあり、澤田健氏これである。予が玆にこの大膽なる傍若無人の言をなして、醫界を蹂躙せんと云ふも、實に氏の天才あるをもつてである。予は前に岸本雄二

氏を天下に推薦した數倍の熱心をもつて、氏を日本のみならず、世界に推薦せんと欲するものである。

二、鍼灸の沿革

鍼灸の起元

鍼灸は何時頃から、我國に行はれてゐるものか判然しないが、恐らく漢方醫學の傳來と共に、多分支那から傳つたものであらうと思はれる。

支那の古醫書『素門』の『異法方宜論』中に「東方の域、天地の始生する所……その病みな癰瘍となり、その治は砭石に宜し、故に砭石は東方より來る」とあるので、この「東方の域」をば日本なりと解釋し、鍼術をもつて日本に神代からあるものであると云ふ説をなす者があり、花野井有年の如きは『醫方正傳』の第二卷で「後世刺鍼の術をもつて朝鮮または唐土より傳はりしものとなすは

信じ難き説とす」と云つてゐるが、どうもこの説には根據がない。何となれば古事記には鍼灸の事を書いた項は一つもなく、後年海外と交通が開けてから、文書に始めて鍼灸の事が見え出してゐるから、輸入醫術に相違あるまい。

外國醫學の輸入は朝鮮醫學をもつて最初となすので、允恭帝の三年（西暦四四三年）に始てて韓方を採用すとあるから、鍼灸の輸入は、これ以後と推定される。後藤艮山は「支那にては伏羲の昔より始まりしを欽明帝の第二十三年に始めて我國に輸入せるものなり」と云つてゐる。或は然るかも知れぬ。

思ふに鍼灸のそもそもの根源は、恐らく印度であらう。鍼灸の基礎的著述の『十四經』の原理は、佛典の『大日經』などの中にも散見して居り『四吠陀論』中にも「鍼刺すわざ」の言葉があり、釋迦と共に印度の衆生の救濟にあたつてゐた醫聖の耆婆は、生れながらにして鍼と藥袋を持つてゐたと傳へて居り、耆婆經、因緣經、四分律、毘奈雜事などは今尚ほ研究を要する聖典である。而し

て『十四經』はこれ等に說かれてゐるものを、編纂したものであると見るが良いであらう。

灸は印度に於て、始から艾(もぐさ)を以てするゐたものか、或は支那に來てから、艾の利用となつた物かわからぬが、十八年間も印度や西藏に滯在して居られた河口慧海師の云はれるところによれば、北方印度や西藏の俗間には、灸治療の一種とも見るべき、鐵桿を燒いて皮膚に當てて疾病を治することが行はれてゐるとの事である。故に灸は或は古代の印度では、燒鐵桿を以てして居り、艾に進化したのではあるまいか。

鍼灸術の保存と再輸出

日本は古いものの保存國で、印度や支那の本家で亡んだものが、往々にして多く日本に殘存保持されてゐるが鍼灸もまた然りである。これ等の療法は日本に於て最もよく保持されて居り、且つその法を泰西へ輸出したのも、日本であつた。これ蓋し日本民族の指頭の敏感が、よく鍼灸の眞道を傳へ得るに適したからであらう。

而してこの灸鍼法は後に至つて却つて朝鮮に逆輸出をなす程になつた。一六八九年にフランスのジャン・クラーセが著した日本西敎史には、我國の天正年間前後の風俗を記した條下に、醫道の狀況を叙し、大病には病者の皮膚二十箇所以上にも灸することあり、小にして燃え易き乾艾を丸め、これに火を點ず、燃え終りて灰となり、これを除くときはその燒きし所、黑痕を生ずるのを見ると書いてある。また延寶元年(一六七三年)に來朝したオランダのリンネ、翌年に來朝したブスホーフ及び元錄二年(一六九〇年)に來朝したドイツの醫家ケンフェルなどが、その著の中に灸法の事を記載し、ことにケンフェルによつ「もぐさ療法」卽ち Moxen therapie の名がヨーロッパに廣つた。その後石坂宗哲の著書をシーボルトが譯し、一六七四年にはビショッフが灸法に就て記載して

ゐる。――さりながら鍼灸法は全く實地に就て學ぶに非ずは會得出來ないものであり、且つ白人種は指頭神經が敏感でないので、遂にものにならなかつたのである。

我國の鍼灸法は、欽明帝の時代に輸入され、平安朝時代から鎌倉時代を經て室町時代に至るまで、主として癰疽、疔癤、瘰癧などの瘡瘍を治するに用ひられた。室町時代になつて信濃の良心といふ人が朝鮮に渡り、わが和氣、丹波の兩家に傳はつてゐる八穴灸法を傳へた。――而して鍼灸法の治法を大觀するに德川時代の始めまでは、この法は主として外科的疾病の治療に用ひられたのであり、これを百病の治療に用ひたのは後藤艮山で、彼は鍼灸道の復興の祖で、後藤一派はこれがために灸家の稱を得たのである。而してこの艮山の復興した『十四經』を基礎とする鍼灸法は、あまねく漢方醫家に採用せられ、治療上に一進歩をなしたのである。

さりながら後藤艮山の復興によつて、かなりの程度に分明して來た經穴法は明治に入つて再び混亂に陷入り、鍼灸は衰退するに至つたが、鹿兒島の鍼灸醫たりし松元四郎平氏が『十四經』や漢方の古典や實驗例を集めて、始めて經穴の部位を解剖學的に明かにせんと企てた。氏の努力によつて經穴の部位が、ほぼ判明したが、氏はむしろ學者肌の人であつて。臨床家でなかつたがために古書にある誤謬をそのままに踏習してゐる點も少なからなかつた。然し氏が經穴學を近代解剖に照し、入門に便宜にした業績は非常なものであつた。

澤田健氏は之より先、別に『十四經』の研究に從事してゐたが、松元氏の研究に刺戟されて之を臨床に實地應用して、經穴の部位を適確にせん事を志し、研究二十年、遂に『十四經』の奥堂に通じ得たのみか、從來の鍼灸書に禁穴として、鍼灸をなすべからずと定めた點の中、大に活用すべき點あるを發見し、者婆の法を完全に復活したのである。卽ち氏は三千年來、作用の不明に陷入つて

ゐた點をすら闡明したので、耆婆の再生者と云つても差支がない。然し氏は全く實地の人で、文筆の士でないがために、その到達した境地をも表現發表するに由なく、空しく世に隱れてゐたのである。然るに予が昨年『日本及日本人』に漢方復活論を草した事が動機となつて氏を知り、予は今後の生涯を擧げて氏の經驗を基礎とし、松元氏の著述を修正し、以て鍼灸學の大道を大成せんと志したのである。予が鍼灸の本道を知り、玆に紹介の勞をとるのも、ひとへに氏の如き大天才あるがためで、予の微力なる良く氏の業績を百世に傳へ得るならば、予が生存の意義これに如くものがない。

澤田氏の偉大なるは、全く自我といふ物を棄て、古聖賢の道を復活して守られてゐる點で、氏は多賀流とか杉山流とか吉田流など云つて、種々の流派を立ててゐる者をして、古人の法を全部的に解譯する事が出來ず、たまたま其一二を知り得て、これを大發見の如く誇り一流を稱するものと笑つておられる。予

は今この天才に師事して、古醫道の眞精神を伺ひ知り、今更に現代の病理學の淺薄なるを思はぬ譯にゆかぬ。

而して更に鍼灸の偉大なる古醫道を、現代科學の名によつて、日本に復活して之を治療の王座に祭らんとするに當つて、予はこの使命が因緣的に我日本に委ねられてゐたのでないかと思はれてならぬ一事がある事である。それは印度から醫道が支那に入つた時、その中の經絡の三焦といふ部分が不明であつたので、黃帝が岐伯に命じて人間の生體解剖をなし、これによつて人體の解剖模型を、銅人形として作つたといふ事が、醫學上の傳說として傳つてゐる。——然るに黃帝も岐伯も實在せし人物で、且つこの生體解剖も亦、實行されたのらしく、現にその人類の文明史の一紀念碑とも云ふべき、その銅人形が日本に傳つてゐる。——卽ちそれは東京の上野の博物館に秘藏さるる銅人形がそれで、豐大閤が朝鮮より持ち來りしものであると云はれてゐる。

この銅人形は和漢三才圖會にも出ており、日本の國寶たるべき品たるのみならず、醫學上の三種神器とも云ふべき人類の至寶である。予はこの幾千年も經過せる、傳說時代の銅人形を見るにつけても、この銅人形によつて象徵さるる古醫學は、原產國に亡びて後、日本に維持さるるを思ひ、且つそれを復活して人類の救濟に當ることが、日本の使命に相違ないと思ふ。蓋しこの銅人形は天意あつて日本に渡りしものでなくて何であらうか。

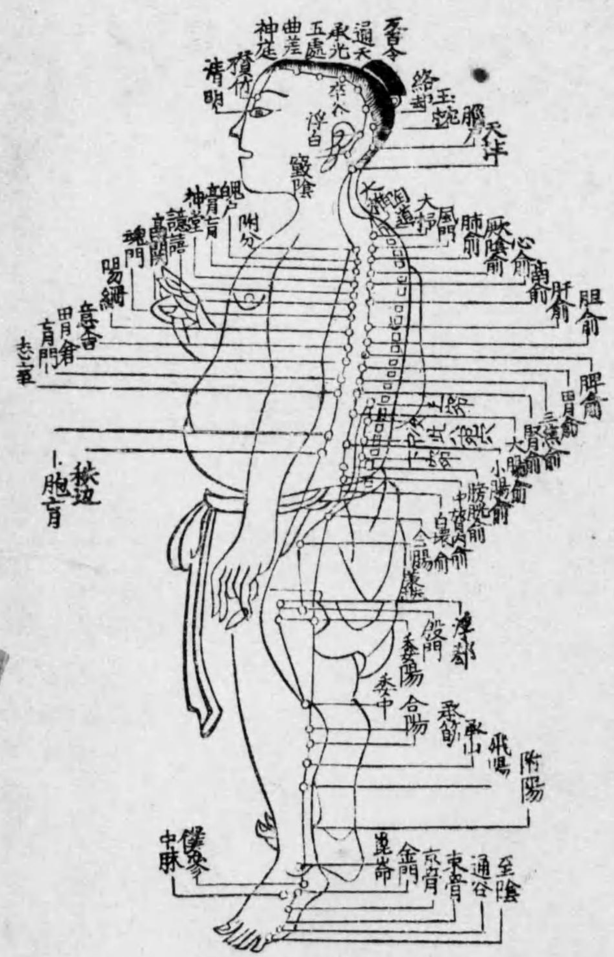
第十章　鍼灸の理論と實際

一、鍼灸に特有な理論系統たる『經穴』

理論は洋方的には不可解

鍼灸は如何なる理由によつて奏功するのであらうか。——これを現代の生理解剖の立場から說明せんとする事は、目下のところ全く不可能である。而して

（甲）



足太陽膀胱經

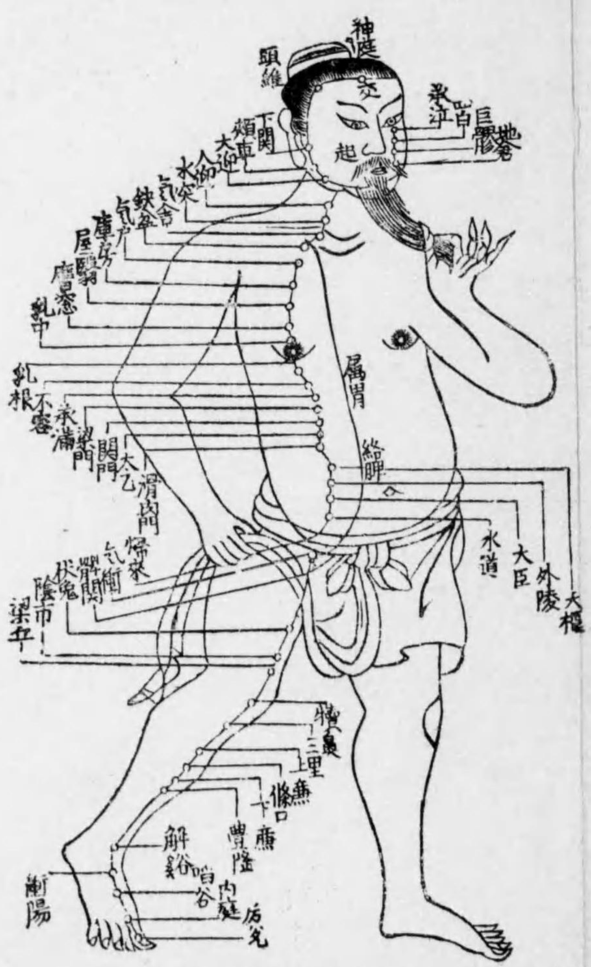
第十章　鍼灸の理論と實際

一、鍼灸に特有な理論系統たる『經穴』

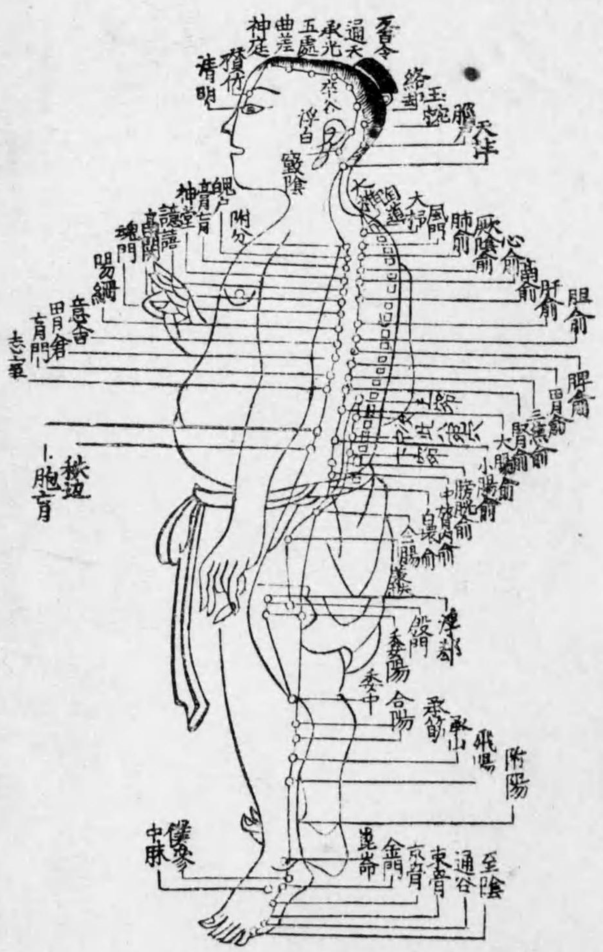
理論は洋方的には不可解

鍼灸は如何なる理由によつて奏功するのであらうか。――これを現代の生理解剖の立場から説明せんとする事は、目下のところ全く不可能である。而して

手陽明大腸經



足陽明胃經



足太陽膀胱經

足少陽膽經

手少陽三焦經

足少陰腎經

若し強ひてその理論を作らねばならぬとならば、そは今後の學徒の責任に屬すべき事柄である。

かくの如く鍼灸の理論や基礎法則は、西洋醫學の立場から見れば、全く無いやうであるが、これを東洋醫學の立場から見れば、ちやんと系統と理論が具備されてゐるので、現に治療に使はれて來たのである。澤田健氏の如きはどうにかして、この理論と法則をば西洋醫學的に立て直して見やうとして、遂になす事が出來ず、その企てを諦めてしまはれた。幸田露伴氏や若宮卯之助氏の如きは、そのやうな事はとても企ての及ぶ能はざることで、單に東洋的な系統によつてのみ説明し得るものである以上、決してそれを西洋的な生理解剖を基礎として説明するに及ばぬと云ふ事を、澤田氏に忠告せられてゐる。——かくて予は東西の學術は、果して完全に融合し得るものなりや否やさへ、或點まで疑問とせざるを得ず、且つ科學の形式に西洋的なものと、東洋的なものがある事を

認めざるを得ない。

經穴とは何であるか

鍼灸は『經穴』と稱する身體の或部位に施術をなして治療をするものであるが、然らばその經穴とは如何なるものであらうか。――この事を通俗的に、わかり易く說明するには、澤田氏が鍼灸の道に入られた動機を述べることが最も便利である。

氏は新海流の柔術の達人であり、かたはら接骨の名手として聞えてゐたが、氏は始め柔道の當身の殺活の部位が、鍼灸の部位と同じである事に氣が附き、鍼灸の部門に研究を進められたのである。氏は曰く「柔道の當身の部位は、身體の各所に散在して居り、手や足の或個所に打撲を與へると、それと殆んど關係がないやうな內臟に障害を起し、而してこれと反對に、內臟のドコかに障害や疾病があると、所謂經穴と呼ばるる身體の或個所に、あたかも打撲によつて

傷害を受けしが如き症狀が見えるのである」と。――この不思議な相互關係を知つて氏は鍼灸に志し、鍼灸術の經典たる『十四經』の難解不明、捕へ難き本を、二十年もかかつて研究し、遂にその書に秘めし謎を解いたのである。

柔道の當身の個所と鍼灸の經穴とは、如何に不思議な合致があるか、聊か此事を述べて置く必要がある。芝居でよくやるが、內藤外記が仁木彈正に押へつけられ眞向から斬りつけられやうとする時、外記が扇子をもつて彈正の足の甲をポンと突くと、彈正がひつくり返る處がある。あれは柔術では『草がくれ』の當てと云ふので、鍼灸では『臨泣』及び『地五會』に相當し、半身しびれ、膽囊に障害を與へる處である。之に灸をすえれば飛びあがつて、きりきり舞ひをすると云はれて居り、鍼灸を禁じてある場所である。

手の『三里』は癰疔の專門灸穴であるが、此場所は柔術で敵の獲物を打ち落すために、手を橫にして叩く處で、此處を打たれると半身がしびれ、場合によ

つては氣絶してしまふのである。足の脛の後ろ横の『三陰交』は腎臓、脾臓、肝臓の經絡が集るところで、有用な灸穴であるが、此處を蹴れば足がこぶら返りをし、三陰交の上の『築賓』を蹴ると體がこわばつてしまふ。誰でも知つてゐる柔術の最も恐るべき當ては『水月』とてミゾオチで、ここて當てられると活法を施しても蘇生せぬ即死の場所であり、之に鍼や灸をほどこせば同じく即死を免かれぬのである。この外に當身は色々あるが、餘り有用な事でないから此位にして切りあげて、當身の反對の活法の事に移るが、活法になると更に驚くべき醫學的關係があるのである。

活法の第一は『左水』と云つて、背椎の大椎より數へて五番目の背椎と、肩胛骨の間を打つのであり、之によつて心臓の鼓動を起さしむるのであるが、これは鍼灸では『心俞』と云つて、心臓病の治療經穴である。――かくて『左水』の活で生き返らぬ時は、第二段の活を施すので、それは鍼灸で肝臓と脾臓

を治す『肝俞』と『脾俞』の間を打つのである。――これでも生き返らぬ時は第三段の法として背椎第十四の腎臓の治療穴たる『腎俞』をば、被術者の左手を上にあげて、膝で強く押すのである。

かくて尚ほ蘇生せぬ時は、最後の法として『總活』と云つて、絶息者を仰けにし、拳を臍の上る置き、臍と『丹田』の間の『氣海』を親指でぐつと押すのである。かくすれば他の部位で蘇生しなかつた者も蘇生し、之で生き返らぬ者は絶望であると云ふ事になつてゐる。蓋しこの『丹田』の部位は、人間精神の納まるところで、一元の大極であるとされて居る。東洋醫學では精神とは心臓と腎臓の働きを指した事となつている。東洋人が『氣海』と『丹田』を喧ましく云ふ譯は之で分り、丹田に力さへこもつてをれば、人間は決して病氣などにはかゝらぬといふ。

以上の活法の順序は、第一法が惡ければ第二法、第二法で足らねば三四の法

と、系統と順序が整然としてゐる。而してこの活法の順序は、內臟の關係を示してゐるものでなくて何であらうか。卽ちそれは肝臟や腎臟や脾臟に固障があつても、心臟を動かし得ぬと云ふ、內臟器官の聯絡を示しており、活法を順次に施してゆく事は、如何に意味の深長なる物であるか。他の臟腑に刺戟を與へて、神經的に連絡のなさそうな心臟を動かす事は、西洋の生理解剖では全く說明ができぬ。——これは西洋の生理解剖が全く屍體解剖から出發してゐるからで、これだから予は西洋の生理解剖は、學問としての價値がないと斷定する所以である。これに反し東洋醫學は、常に人體を綜合的な一個の生體としてのみ研究するから、以上の如き原理と系統が發見されてゐるのである。

澤田健氏は京都の武德殿からの歸路、疏水で死んだ者を見た。警察醫も來て居り、最早や如何とも仕方がないと云ふてゐた。そこで氏は試みに我に活を入れさせよと云ふと、活法の最後の法を施すと、死者は屁をこき、水を吐いて蘇

生してしまつた。

柔道の活法では、水死人で肛門の開いてゐるものは、如何とも手の下しやうがないと云ふ事になつてゐるが、澤田氏は肛門の開いてゐる者でも、時間さへ經過してゐなければ、鍼灸によつて肛門を閉ざしめて、次にまた鍼灸によつて之を活かさしめるのである。その妙法は神に近い。

この『氣海』と『丹田』は、活法として頗る大切な場所たると共に、盲腸炎の疼痛を卽座に頓挫して治癒せしめる大切な經穴であるから、何人も記憶して置くべきであり、盲腸炎の如きは決して切解したり、藥を飲んだりするに及ばぬものである。——この灸穴の神秘について思ひ出すのは、森村市左工門氏の事である。氏は生れた時に手足冷たく、息も心臟も全く絕えてゐたので死んで生れたと思はれてゐたのである。然るに近所に住んでゐる老婆が、その死を怪み、自分にまかせてくれと云ふて、臍の下に灸をすえて息を吹きかへさせ、灸

を連續すること一週間にして、完全に生きかへらせたものであると云ふ事を聞いた。これも灸の偉力である。

また某氏の子供が生れて三日間、乳を飲むことも、また泣くことも全く出來なかつた。それでただ死を待つばかりであつたが、子供には良く『チリケ』と云ふ灸をすえるから、試みにやつて見よとて其處に灸をすえると、急に泣き聲をあげて乳を飲み始め、遂に死を取り止めて成長したと云ふ事である。昔から子供にチリケの灸をすえるのは、誠に結構な事であつて、今日これが廢れかかつたのは悲しむべき事である。チリケの灸は子供の灸として、これ以上の物は望むべからずと云ふ灸で、子供が鼻がつまつて乳が飲めぬなどは、此處にすえると直ぐに鼻が通るのである。子供に灸をすえるのは可愛そうだとか、皮膚を燒くのは野蠻だとか云ふのは、全く淺薄な考であつて、子供を病氣にして苦します方がどれだけ可哀そうであるか。日本國民が弱くなり、小兒の死亡率が激

増した主たる原因は、日本人が灸を忘れたがためであると云つて大過はない。

内臓の疾病または障害と、身體外部の被打撲的症狀との關係は、洋醫學に於ける、ヘット氏帶といふものに似てゐる。ヘット氏帶とは人體の内臓に疾病がある時には、身體の或部位に過敏な所があるといふ事を、ヘットといふ人が發見して、その過敏なところに名づけたので、一例をあげれば肝臓の病には左の肩胛部に、腎臓の病には陰部と背部に、膀胱の病には腰部に、子宮の病には胃に、股關節炎には膝に、胃の病は背部に、狹心症には左または右の手に、肺病や肋膜炎には腹に痛みを感じ、腸の寄生蟲(蛔蟲)には鼻の中に癢痒を感じたり或は陰部に痛みを發するといふやうに、多くの病はこのヘット氏帶、卽ち過敏な部位が身體のいづれかに出來るのである。

而してこの過敏なる部位は、多く廣い領帶となつて現はれるのであるが、そのうちで最も過敏なる一點があつて、これをヘット氏帶の最過敏點といふのである。この點が卽ちその疾病と最も關係の深いところで、これが不思議にも鍼灸の經穴に相當してゐるのである。——勿論このヘット氏帶の最過敏點は、全身の經穴に悉く一致してゐるか否かは、まだ十分に比較研究しないが、經穴の要點に近いことだけは明な事實である。これから考へても十四經の經穴學は、決して舊醫學の分野として葬ることが出來ぬもので、西洋醫學ではやつと今日になつて發見してかけて居るのである。これに反し東洋に於ては、この方面の研究が既に數千年前にちやんと達成されて居り、且つそれを系統的に配列して經文にも記述され、また治療にも應用されて居り、予等は玆に再び近代科學の名に於てその復活を絕叫するに至つてゐる。——これによつて之を見るも、臨床醫學は數千年來、果して進步をしたのであらうか、或は却つて退步したので

あらうかと疑問はざるを得ない。

鍼灸をなす部位を『經穴』と呼び來つた理由は十分にわからぬが、鍼灸は普通にスヂと呼ばれる筋肉の所々にある、かすかな凹所をさぐり求めて、其處に施術するのであるから、スヂの上の穴と云ふ意味で、經穴と呼ばれたのであらうと思ふ。——而してこの經穴なるものは全身に三百六十有餘あつて、十四經にはそれ等の經穴の病理的系統が、細かに組織的に分類配列されてゐるのであるから驚くの外はない。

經穴、卽ち鍼灸の壺をさぐり求める事は、極めて指頭の敏感なる者ならでは出來ぬ技能であり、その個所さへ求め得るならば、灸の如きは甚だ小なる物で足りるので、後藤艮山は灸の大さを鼠糞大としたが、澤田氏は更にそれよりも小さく、鉛筆の心よりも小さな灸をすえられる。よく坊間で見るところの、眼玉の如き大きな灸は、この經穴をさぐり求め得ぬ者が、當らずと雖も遠からず

式の、散彈的な灸點をなすに外ならぬのである。灸は大きいから効があると云ふものでなく、小さくて良く現に効を奏してゐる。

かくの如く經穴を求むる事は頗る困難な技能であつたから、經穴に通達し得る者が稀れで、この學は混亂棄去に陷入り易く、從つて他國では亡び行き、世界で指頭の敏感なる日本人種の間にのみ、繼承維持されたのであらう。——且つ思ふにこの經穴をさぐり求める事は、如何に科學が發達しても、機械的方法に依賴することが出來ず、指頭によつてのみ、さぐり求むるの外なきものである以上、恐らく西洋人の模倣追從を許さず、日本醫學の特技たるに止まるものではあるまいか。

經穴の生理解剖的性質

人體內に存する病原菌は、溫熱によつて直接に死滅せしむることは殆んど不可能である。總ての細菌を撲滅するるは高熱を要し、その中で最も溫熱に弱い

結核菌や淋菌さへも攝氏六十度以上の熱を與へなければ死滅するものでない。灸は普通、攝氏の四百度以上に達するものであるから、直接に病菌の存する部位に施せば、或は其處の病菌を殺滅することが出來るかも知れぬが、鍼灸の部位たる經穴は、決して直接に病菌の宿つてゐる處ではないのであるから、灸の溫度が遠くに傳達されて疾病を治すとは云へぬ。ことに鍼にて疾病を治するに至つては、溫度は全く無關係である。よつて鍼灸術をもつて、消毒藥が病菌に作用する如きものであると思つたなら、飛でもない間違いである。

故に强いて鍼灸の効果は何によるかと云へば、一種の誘導療法であるとでも申すの外はない。然らばその誘導をなす中介物は何か、卽ち經穴の底にあつて刺戟を受けて誘導作用をなす物は何かと云ふと、或場合は神經、或場合は血管、或場合は淋巴管であり、またそれ等の何れにも屬せぬ場合もある。而してそれは何故にその如き効を奏するやは、生理學的には未だ明かになし得ない。

一例をあぐれば、風邪にて氣管や咽頭が痛んで、濕布をするとか、プロタルゴールを咽頭に塗るとか云つて、物も云ひ得ないやうな場合に、足の內踝、俗にくるぶしと云ふ處の下方、位七八分のところの『大谿』といふ點に灸をすえると、直ちにその痛みが止つてしまふが如き、手の『陽池』といふて手首の關節の甲、卽ち尺骨と腕骨の關節の背面の中央に灸する時は、子宮左屈が卽刻に正位に戻り、且つ子宮痙攣や睪丸炎の痛みを直ちに頓挫せしめるのであるが、これ等の下に横はる神經を見て、何故その驚くべき効があるのかを知る事が出來ぬ。ただ事實として偉効が現に存すといふだけである。而して治療上には事實だけで澤山であり、理論の如きは知識的興味以外の何物でもあるまい。故に無關と理論を追及したがる者は、とかく庸醫の常と云つてよからう。

我國の鍼灸道を誤つて混亂せしめし者の鼻祖を石坂宗哲とする。彼は我國の鍼術の一大改革者と云はれ、從來の經穴を無視して專ら泰西醫學、ことに解剖

學を基礎として自流を創意せしもので、俗醫には甚だ最もらしき理論を述べてゐるが、實地に關しては全くダメである。彼はその『知要一言』(文政五年)の中で鍼術の理を述べて「さて其要を云はんに竹木、トゲの身に立ちたるも、金銀鐵の鍼の身に立ちたるも同じくトゲなり。誤りて立つと術有つて立つとの相違あるのみ。竹木のトゲ立ちたらば、人力の及ぶだけは拔き去るべし。もし人力にて拔けざれば其人の自然の元氣をもつてトゲの有る所に熱を生じ、漸々精神榮衞ともに集りて、そのトゲの有る所をいよいよ熱を盛にして、その熱にくされて膿となり、人力にては拔けざる所、その膿と共にくづれて身の外に拔け出るなり。膿出でて熱のぞき、もとの無傷の身となる如し。術ありて金銀鐵の針金を病のある所に刺し入るれば、竹木のトゲのある所に熱を生ずるが如く。精神榮衞ともに力を入れて針の下に積りくるなり。しばらく針を止め、程よく鍼の下に集めて、その針をぬき去れば、集り來る精神榮衞にて病者を追ひ散ら

して、たちまち消え去る事、風の雲を吹くが如し」と云つてゐるのなどは、荒唐無稽も甚だしきものである。

鍼灸の理は全く現代の生理學の知識にては不可解であり、事實のみ殘つて輝いてゐる。說明は明日の問題である。鍼灸の經穴をそのまま外國が利用してゐるものにオキシヘラーがある。オキシヘラーは有効か否か予は知らぬが、アメリカではそれを以て治療するに當り『十四經』の經穴の圖表によつてオキシヘラーを使用したのだと聞いてゐる。經穴の理論がわからぬにしたところで、外國の醫學に應用された一例として興味を引くものである。

二、鍼灸治療の實際

鍼灸の理論は以上の如く不明であるが、鍼灸の經穴が的中してゐる時は、如何に偉大なる効果があるものであるかの數例を玆に述べて見やう。これは主として澤田氏の治療を摘錄するのである。——澤田氏の望診は殆んど堂に入つて居り、顏色のみを見て、心、肺、腎、肝、脾の疾病や、ワッセルマン反應に出ぬ潛伏黴毒を知り、聲音によつても如何なる病なるかを察せられる。また婦人の手首や肩を指頭にて觸診し、子宮が左屈か右屈か後屈か前屈かを察し、腹部を見て睪丸炎を察し、足を觸診して耳の固障を知るなど、殆んど神に近きものがある。予は殆んど名醫と云ふ名醫を知れど、その診斷の敏速確實なること、いまだ澤田氏の如きを見た事がない。神戸の攝津病院長の桂田博士の如きは、氏を以て日本一の天才と舌を卷いて居られる。

子宮前後屈と左右屈の治療

子宮の前屈、後屈、左右屈は今日の醫學では如何なる原因か不明であり、多くは遺傳的な原因に歸せられて居り、手術によるに非ずんば整形し得ずと云はれてゐる。然るに澤田氏は直ちに、醫師と立會の上で一分間内にそれを灸をも

つて正位に引きもどすのである。卽ち施灸前に子宮の部位を診て置き、施灸後に再び診斷をなす時は、これが一分間前の子宮であつたかと驚かざるを得ぬのである。それ等は慢性の痙急によつて屈曲してゐるものであるから、その痙急の慢性を除去するには、一度の施灸ではダメで、繼續して施灸して組織の變化を待たねばならぬ。人により異るが一箇月乃至三箇月引續き休まず施灸すれば、子宮は完全に正位に復して戻ることがない。かくして子宮の位置不善より關聯して起きてゐた病的症狀は、從つて自然の除去して行くのである。

婦人に特有な、原因不明の肩の凝り、ヒステリー、リウマチス、肝臟や腎臟の障害は、子宮の位置の不善と關聯して居り、子宮の位置を矯正する事によつて、容易に治し得るのである。予の知る限りに於ては、婦人病の八九までは、原因を子宮の位置の不完全に置くべきもので、この子宮の位置の矯正は、餘りに過多であつて實例をあぐれば幾千件に及ぶほどである。先年大森在住の婦人

が八名、會を開いて氏の治療を受け、その中七名が姙娠せるなどは、稀ならぬ例である。

子宮の後屈や前屈を治するには、臍とミゾ落ち卽ち鳩尾骨の間の中央の『中脘』に灸をすゑれば良いで、子宮が忽然と動いて正位に復するのである。卽ち灸は全く刀を用ひざる驚くべき整形外科である。

子宮は多く左屈せる場合が如く、或醫書には愚かにも子宮は多少左屈せるが常態なりとすら書いてあるが、先に述べし『陽池』と云ふ手首の關節にすえれば、直ちに正位に復するので『陽池』の灸は從來の灸書には、ことごとく禁穴として灸を禁じてゐた所である。——この灸穴の作用を發見した事でも、氏の業績は千古に傳

陽池

へるに足るのである。

澤田氏の高弟にて、目下鹿兒島に在住する城一格氏は、予に子宮左屈より來る附膸症の面白き治例を報告して來た。

鹿兒島の中屋と云ふ旅館の妻女二十八歳產後二箇年ばかりなるのが、兎角氣分が勝れず、二三ヶ月來は吐きが來て最近では食事をすると、直ちに突き返して、殆んど食事が攝れず、僅かに牛乳其他の流動物によつて、榮養を支へてゐる樣な有樣で、主治醫たる町立病院では、食道鏡やその他理化學的に種々出來る丈けの診斷治療をされたが格別の効果もなく、結局食道狹窄との診斷であるとのことで、大に困つて氏の治療を需めて來たのである。氏は診察して見ると全然胃や食道の障害ではなく、只子宮が左屈上昇してゐる丈けのものであるから、その旨を告げると、本人は固より名高い病院長の叮嚀な診療を信じ切つて居るので、餘りに簡單な言に耳を傾け樣としながつたが、氏が之は一つの惡阻

と同樣であると說明したことにより、其病人の母堂のみは大に思ひ當る處あるものの如く、氏の說に感心し、兎も角施灸して見やうとの事で、灸が終ると本人は大層心下が樂になつたと喜び出した。それでその後、每日同じ箇處に自宅で施灸する樣に命じておいた處、五日目に患者がニコ〳〵として來つて、灸をして頂いた翌朝は大變氣持もよいので、恐る恐る普通の食事を攝つて見た處、不思議にも一向吐氣も起らず納まり、お晝も同樣であるので、誠に蘇生の思ひをした。お蔭でその後故障なく食事も取れ食慾も增し、體全體に氣分がよくなつたと云ふた。その後灸を繼續して、全快してしまつた。

子宮の發育不全や、位置の不良はしばしば不感症やヒステリーを伴ふが、これまた鍼灸によつて完全に治し得るので、一時的の催春劑や、甲狀腺から取つたものを用ふには及ばぬのである。——子宮の後屈や左右屈や脫垂をば、手術をしないで灸にて簡單に治し得ると云へば、實際を見ぬ者は殆んど信ぜられぬ

程であり、今日の婦人科は破産の外はないであらう。

子宮痙攣、睪丸炎の治例

これは前記の『陽池』と云ふ禁穴にをすえれば、卽座に治するのであつて、睪丸炎の如きは、腫れて夏蜜柑の如き睪丸が、ここに灸をすえてゐる中に、子供のもてあそぶゴム風船がちぢまる如く、すつと少さくなるのであつて、何のために氷嚢をかけたり、藥を飲んだりするのかと笑ひたくなるのである。

某婦人あり子宮痙攣と胃痙攣を共に發して、注射や氷嚢によつても治せず、二博士がつめかけてゐる面前へ澤田氏が招かれて行き、コンナもの病に非ずと云つて、速治して見せたので博士連が舌を卷いて驚いてゐたと云ふ事である。

その外これと關聯する病たる、淋毒性腔炎や陰門周圍炎はもとより、子宮肉腫や子宮癌まで灸によつて容易に治し、男子の淋病や攝護腺炎もまた、同じく灸のみによつて完全に治する事が出來るのであり、灸が普及すれば花柳病科や

婦人科は全く全滅の外なき運命にあるものである。澤田氏は單に肩と腰の經穴のみを見て、帶下の有無より、腔の右左いづれに炎症あるかをすら察し、毫も局部の內診の如き必要がないのであつて、婦人にとつて大なる福音といふの外はない。

顏面神經痲痺の卽治

興味深きは顏面神經痲痺の治療である。これ等の治療の如きは、今日の醫學では手の下しやうがないものであるが、灸による時は見る見る中に卽治できるのである。而してその速度は活動寫眞にとり得ることが出來るのであり、素人驚かしには、もつて來いの灸である。

これを治療する部位は『陽陵泉』、が最も効力があり、痛みを伴ふてある時は手の『三里』が良く、普通の灸點師の用ふるものとしては『地倉』がある。而して之に併用するに、『肝俞』と『筋縮』を用ふるのである。『陽陵泉』、『三里』

は誘導法であり、『地倉』は散化、『肝俞』と『筋縮』は根治療法である。

『陽陵泉』といふのは、下肢の腓骨小頭の前外側に位し、膝關節の外側の下方であり、その下には前脛骨動脈と腓骨神經の分枝がある處である。『手の三里』とは肘關節の横文筋の末端、『曲池』の穴の直下三寸の穴である。序でに云ふが『足の三里』とは俗に長命の灸として衆人の知る所で、膝眼の下三寸、脛骨の外廉大筋の内にある處である。『地倉』とは口の兩端の上唇と下唇の合ふてゐる角で、俗に口角といふ處で、顏が左に歪んでゐる時は右にすえ、右が歪んでゐる時は左にすえるのであるが、これは顏面ゆへ、なるだけ用ひないのが良いと思ふ。『肝俞』とは背椎の第九と第十の關節の一寸五分ほど開いた左右の二點である。『筋縮』とは背椎の第九と第十との間で背椎の眞中處である。

佐多博士によつて、腦黴毒に原因する頭半面神經痛痙攣と診斷され、六〇六號を注射したり服藥したりして、約一箇年も治せなかつた患者が、困却のはて

澤田氏を尋ねたところ、黴毒に非ずして膽囊の疾患に原因する神經痙攣痛であるとして治療され、三日ほどしてその苦痛が取り去つた如きは、類例として興味の引かるるものである。

丹毒の卽治

丹毒の治療も活動寫眞にとれる速度で、快癒せしむる事が出來るもので、上膊の外側の『兌命』と云ふ所に灸をすえれば良いので、丹毒で變色してゐる皮膚が、すえてゐる中に見る見る退色してしまふ。——これは如何なる理由によるか全く不明で、病菌に抵抗する白血球が急に出來る故か、抗素が出來る故か全く不明である。之を見れば丹毒のワクチンの如きは、全く兒戯とでも申の外喩へやうないものである。

癰疔の治療

癰も疔も甚だ痛い惡性ものであるが、これまた活動寫眞にとれる。痛みと腫

れは手の『三里』にすえれば、直ちに除去することが出來、腫張變色は見る見る中に減退する。而してその根は深部にあつて切解せねばならぬものであり、場所によつては生命にかかはるものであるが『養老』といふ經穴に灸をすえれば、一晝夜の中にその根が上部に吹き出て、心だけが拔けて化膿する事がない。

『養老』と云ふ部位は、手の尺骨の莖狀突起の正中であり、手の外くるぶしの上である。癰疔のために苦しむ人を見、且つ無用な切解を受けるを見れば、實に同情にたへないものがあり、これは雲州侯の御殿醫たりし吉見氏の遺法である。

盲腸炎、胃痙攣の頓挫

盲腸炎の猛烈なる疼痛は『氣海』に灸をすへれば、卽坐に痛みが止り、根治法としては『腎俞』と『大腸』にすえれば良いのである。胃痙攣は足の『梁丘』で頓挫し、根治は『中脘』や『脾愈』や足の『三里』にすえれば良く、決して

モルヒネの如き中毒を起し易きものを用ふるに及ばぬ。

『氣海』とは臍の下一寸五分の處で、丹田の五分上である。『腎俞』とは脊柱の第十四の左右、一寸五分くらひの二點である。『梁丘』とは膝關節の上の外側の角であり、『脾俞』とは脊椎第十一椎と第十二椎の間の左右一寸五分の二點である。

ついでながら附記するが、婦人の子宮痙攣や男子に於ける疝癪は、しばしば胃痙攣と性質が異るものであるに係らず、しばしば胃痙攣と混同されるも、これは灸の部位が全く手と足と異るものであるから、術を施すものは十分なる注意を拂はねばならぬ。

腎臟炎と尿毒症の治療

腎臟炎や之に附髓する尿毒症の如きも、灸にて簡單に治療する事が出來、浮水症で全身が樽の如き者も、灸をすえてから一二時間の中に排尿し始め、排尿

しきりとなり、決して死亡するが如き危險なる疾病ではない。その灸點の部位は、『腎俞』、『京門』、『上髎』、『中極』、『水分』、『膀胱俞』及び足の『三里』と『三陰交』にすえれば良いのである。――これ等の經穴を一々說明する事は、讀者にとつて煩雜であらうから略して行かう。

流行性感冒の即治

最近流行性感冒が非常に流行し、死亡者が續出する有樣で、大に恐れられてゐるが、これも灸術の方から見たならば、全く病といふ程のものではなく、人の體質の如何によつて遲速の差異があるが、灸をすえてゐる中に油汗が出て治る人もあり、一時間か二時間後に發汗する人もあり、その日の中に全快してしまふのである。これは十四經にない處の奇穴の一種である。マスクで流行性感冒を防がんとするのは、網をかぶつて雨を防がんとする類に等しい。

黴毒の治療

黴毒も灸によつて極めて簡單に治するものであつて、サルバルサンの如きを毫も用ふるに及ばず、衰弱が甚だしきため、その注射を用ふ事が出來ぬ如きものでも、灸によれば極めて完全である。ことに水銀劑を用ふる時は、齒を亂れさせるものであるが、灸に至つてはそれ等の恐れは全くない。

澤田氏は極度の黴毒患者を治せられた興味深い例を持つて居る。その患者は女性で臭氣を發し、陰部や子宮の如きは、目もあてられぬ狀態を呈して居り、病毒は骨にまで及んでゐて日夜疼痛が甚だしく泣きあかしてゐたものである。病院や醫士は如何とも手の下しやうなく、絕望を宣言して注射や入院をすら謝絕したのであつたが、澤田氏を傳聞して治療を乞ふたのである。よつて氏は之に灸をすえたところ、卽日より尿色が變じて臭氣が、鼻もちのならぬものとなり、更に三日目からは大便が綠色を呈し、續いて大便の代りに鼻汁の如き粘性の綠色物を排出して、その排出物が肛門から覗き出すが、自ら息き張ることが

出來ぬので、その實母は杉箸をもつて、それを引き出して見ると、ずるずると一尺あまりのソウメンの如き絲となつて出て來たとの事である。かくして尿と糞とによつて毒物を排出すること一週間ばかりにして、疼痛が全く去つて床に坐し得るやうになり、五十日にて全快した。その間一滴の藥物を用ひざること勿論である。この患者は澤田氏が取扱つた黴毒患者の中で、最も難症の者であつたと云はれてゐる。

澤田氏は常に背の經穴を八箇所求めて、黴毒の有無を知り、潛伏性のものをも見出されるのである。而して血液檢査にて陰性反應であつて、病毒がないと斷定されたものでも、一度これ等經穴に施灸して、二三日後に再び血液檢査をなす時は必ず潛伏性のものが移動して來て、陽性反應を呈するのである。これは實に不思議な位である。氏が黴毒の有無を診斷せらるるのは『天髎』、『蒼盲』、『意喜』『騎竹馬』の四穴で左右八穴である。

眼の病氣の治療

眼球の疾病の治療に對して、眼底檢査とか稱して、眼鏡で目の底を覗いたりする洋醫の藝當の如きは、實に噴飯を禁ずることが出來ぬものであつて、病的症狀を覗いてみて、その原因が分るのであらうか。凡そ眼球の病は多く內科的原因によるものである以上、內科的に治するの外なきものである。而してこれに對しても灸は實に意外なる効果を示すものである。

結膜炎、白內障、綠內障、トラホーム、バセトー氏病、近視はもとより、初めの中なら淋毒性結膜炎すら、痛みを直ちに頓挫せしめて治るのである。ことに不思議であつて、これを語るも殆んど人を信じさせる事の出來ぬのは、亂視や色盲や双視眼までが治し得る事である。——これ等は現代の眼科の生理學を根底から粉碎するものであるつて、澤田氏はこれ等の原因に就て、奇想天外の說を立てて居られるが、この興味深き說の紹介には止まつて居れぬ。——然し

暗示的に之を要言をるならば、眼球の攣急に外ならぬと云ふのである。

齒科諸病の治療

今日の齒科醫が、返答に最も苦しむ處のものは「こんなに毎日齒を掃除してゐて何故に齲齒にやつたり齒根膜炎になつたりするのか」と問はれた場合である。これ彼等が口腔の諸病をも、多く病菌に原因すると思つて居るからであつて、義齒や充塡を除き齒科の多くは內科に屬すべきものである。

齒痛の如きは、敢て注射やミグリンを與へるに及ばず、『溫溜』とて腕にすえれば直ちに頓挫し、顎骨の骨膜炎や齒根膜炎の如きは、脾臟と腎臟とを治せれば、自然に治して行くべきものである。

其他の例は略す

灸鍼の效果の偉大なると、その及ぶところを一々ここに述べて居たならば、たちまちにして千頁の著書をなすべく、予は澤田氏に師事してその說を解剖學

的に平易に記述して、後世に殘すべき標準本を作る事にしてゐるが、苟くも鍼灸にて治せぬと云ふ病はなく、天然痘や癩病の如きすら、またヂフテリヤの注射にて手遲れになりしもの、子供の疫利の如きものでも極端な末期に非ざる限りは治し得るとの事である。澤田氏に未だ治例なきは腥紅熱のみで、これも經穴の充血腫張を見出して施灸すれば、治せざる筈なしと云つて居られる。天然痘の如きは灸をすえて一二時たつ中に、膀胱カタル尿の如き白濁尿を下し、その熱の高きこと火傷をするほどに感せられるとの事である。

また臺灣の惡性マラリヤの如き、キニネーの寸効を奏せざるものも、灸を一度すえれば脫快し、二日三日も灸をすえるに及ばぬ。肺結核の難症たる、肺の下部より壞疽し始める物も、氏は腎臟に原因する肺病として、腎臟を治する事によつて、數ケ月中に快復せしめらるるのである。動脈瘤を完全に除去せらるるに至つては人間業ではない。

ことに驚くべきは漢方の藥物療法でも治せず、西洋式な開腹術による外なしとしてゐる腸の捻轉の如きすら、鍼灸によつて速刻に治するのである。――かく鍼灸の効果の及ぶところを考ふならば、如何ほどであるか殆んど端睨するところを知らぬ。故に鍼灸術は當然に治療の第一義に置くべきものであるが、ただ如何せん殘念な事には、經穴に通曉することは稀世の天才に非ざる限りは出來ぬことである。それで必然に診察入門の容易である藥物治療が、漢方の中心醫學となり、灸鍼は附屬的位置に立つは止むを得ぬ事である。

鍼灸はかくの如く入門達成に困難な物であるから、この道を今日の如き殆んど無學な所謂鍼灸師に委ぬて置くのは、非常に間違つた事と云はねばならぬ。鍼灸術の運用は漢方の藥物治療に通達し得たる者のみに許し、藥物治療と相ひまつて行へば、非常なる偉効を奏し得るのである。內經に『湯藥は內より攻め鍼灸は外より攻む、卽ち病逃る所なし』とあるは味ふべき事である。將來の漢

方醫學は昔日の如く、鍼灸と握手してその偉力を發揮せねばならぬ。

鍼灸に對する或種の誤解

鍼灸は以上の如き偉大なる効果を有するものであるが、世には之に對して或種の誤解が行はれてゐる。卽ちそれは、病勢が非常に急な場合だとか、或は衰弱の甚だしき者とか、或は風邪にかかつてゐる場合には、鍼灸を施してはならぬとか、また灸の個所が化膿して來た場合には、一時灸をば中止せねばならぬとか云ふ論議であつて、これ等は全く灸の何物たるかを知らぬ言である。

若し病勢が急な者や、衰弱の甚だしき者に鍼や灸をしてならぬとならば、鍼灸は病勢の急ならざる慢性疾患や、或は健康體の者のみに行はねばならぬもので治療法としては殆んど不用なものではないか。鍼灸は藥力以上に奏功の早いもので、如何なる疾病であつても、如何なる衰弱性の者に對しても、苟くも施せぬと云ふ事がないのである。決してそれは病勢をして、更に急に赴かしめた

り、或は衰弱者をして、これに耐え得ずして死なせたりする事はないのであつて、病勢が急であればある程、藥力の及ばぬ衰弱性の患者であればある程、鍼灸の功はいよいよ發揮せらるるのである。卽ち鍼灸の驚くべき功は、むしろ救急法としての點にある。然しいくら鍼灸が偉大な効力があるからと云つて、命數の盡きたものには寸効もなきは明かであつて、それ等の者とても鍼灸のためには、死期を早めるなどいふ事は全くない事である。

また或疾病には鍼灸がいかぬ、風邪の時は休むが良いとか云ふが、これも全く鍼灸の何物たるかを知らぬ言葉で、鍼灸は決して疾病に對して愛憎を持たぬのである。そは如何なる疾病に對しても良く、また如何なる場合にも良いのである。風邪の時はイカぬなど云ふのは、餘りに馬鹿げた云ひ分であつて、風邪の如きは卽座に治してしまへるではないか。

また灸によつて、その部位が化膿する場合には、灸を一時やめて石灰酸水か

オキシフールで消毒して、傷の癒ゆるを見て再び始めよなど云ふ、今日の全國の鍼灸檢定の教科書の文句の如きは、愚人何を云ふかの憤りを發せしむるものがある。灸は丹毒や破傷風の如き猛烈な物、癰疔の如き物をすら治する法である以上、決して化膿する恐れがないものであつて、それが化膿するのは、毎日灸を怠るものか、或は特に化膿菌に對して抵抗弱き人である。——而してこの化膿を防ぐには、その化膿部の上に、石灰酸水やオキシフール以上に殺菌力の強い灸を點ずるに、しくものが無いのである。また更に化膿し易き體質であらば更に化膿を防ぐ灸をすえて、その化膿的體質を改善して行けば良いのである。

手の『曲池』に灸をすえる時は、化膿を防ぐものであつて、外傷を蒙つた場合には、之に灸をすえれば、決して化膿する事がなく、創傷の手術には欠くべからざるものである。故に予はせめてこの『曲池』の灸と、痛み止めの灸のみでも、わが軍陣醫學に採用させたきものと思つてゐる。

世には『打膿灸』と云つて、一錢銅貨大の灸をすえ、その跡に吸ひ出し膏藥と稱するものを貼用して、故さらに化膿せしめて、久しく膿汁を流出せしめる物があるが、同方法は熱いのと痛い事だけが損であつて、無効に近いと申しても良い。何となれば同法は自己免疫的方法により、僅かに化膿菌に對する抵抗力などを養ふばかりで、それ位の効果を目的となるならば、何もその樣な苦痛を拂ふに及ばず、經穴に適した小灸にて十分に、それ以上に所要の目的を達し得るからである。これ等の大きな灸法こそは全くの蠻法であつて、灸道の名をはづかしむるもの、速かに世人はこれ等に對する迷信より覺めて廢止せねばならぬ。此外に鹽灸だとか溫灸だとか、蒸灸だとか色々あるが、これ等は總て『十四經』に敎へられあるの正道をはづれてゐる邪道である。——勿論これ等とてもヂアテルミー位の効力はあらうが、眞の灸道の偉大なる効果に較べては、太陽と星のやうなものであらう。

醫術の中の、最も大切な鍼灸道はその奧堂に對する事が困難なために、今や最も愚なる鍼灸法の流行によつて、その姿を隱さねばならなくなつた。惡質は良質を驅逐すると云ふグレシャム法則に似てゐる。予等は大なる勇猛心をもつて、再び眞の鍼灸を世に行はしめねばならぬのである。

三、鍼灸の一分野としての按摩

按摩法の原理

按摩法も今は冬の夜更けを、悲しき笛の音に涙をさそふ、盲人の憐れな賤業に墮ちてしまつたが、これまた其本質に於て偉大なる効力があるもので、昔は鍼灸摩と云はれ、按摩は鍼灸道の一分野であつたのである。而して之また十四經の經絡を基礎として施術せぬ限りは、殆んど効なきに近いものである。この按摩法が輸出されてマッサージとなつたは、誰も知るところであらう。

然るにこの偉功ある按摩法が、盲人の賤業に類するものに墮ちたのは、經穴學が混亂に陷入つたがために、按摩道の本體が脱線して、その眞正の効果を發揮する事が出來なかつたのと、その法は鍼灸や投藥のための診斷と異つて、治療の短きは一時間、長きは半日以上をも要し、ために多人數に施術することが出來ぬために、何時しか盲人の如き落伍者の、內職的な賤業になつてしまつたのである。

さりながら眞正の按摩道が、如何に優秀なる治療法であるかは、治療の結果について見るの外はない。予は今日この按摩道の大家に就ては十分なる知識がないが、土屋松乃女史(舊姓中村)と島本來子女史の按摩法の、驚くべき効果を知つてゐる。然も不思議な事には、二人とも吉益東洞と鄉里を同うする廣島縣の產であり、二人とも十幾人もの解剖をなしたと云ふ經履までが似てゐる。島本女史の法は經絡、特に淋巴腺のモミ療治で、土屋女史の法は壓動療法と云つて、

指頭の代りに、湯を入れた種々の形の瓶をもつて、押すのがその特色である。

西洋の諺に『小兒と愚人は事實を語る』といふのがあるが、病氣の治療もまた事實を語るものであつて、今まで大患で危篤に頻してゐたものが、忽ち快癒して起き立す事實は、鮮かなもので議論の餘地がない。

それで予はここには主として、この二人の老ひし女史の事績を語つて、後世に參考に殘さうと思ふ。而して特に土屋女史の方法は、湯の溫度と指頭よりも力を經濟にし得る瓶の壓動によつて、全身の經絡、筋肉及び血管や淋巴線の凝結を解いて、血行と新陳代謝を旺んにして、內臟諸器官の活動と全身細胞を活力あらしむめ、神經作用を常態

に復せしめて、以て治癒の實をあぐる點が優れてゐる。

土屋松乃及び島本來子の治療

土屋女史も島本女史も、醫者が見放した難病または危篤な患者を治療されたこと、數百例をもつて居られる。一々その例をあげるのは煩雜にたへず、また限定された紙數であるので數例に止め、先づ土屋女史の治例から擧げるが、女史は帝大に來てゐたドイツのベルツ博士にも就いて治療を研究し、ドイツ人の如きは治療法を知らぬ淺薄なる野蠻人であるとの結論に達したのも、予と意見を同うして愉快な事である。

有名なる醫學博士、永井潛氏の夫人が久しく胃を病み、遂に口中に腫物が出來、飲食が全く不可能となり、神經の衰弱が極度に陷入つて言語が殆んど不通になつた。そこで氏の老女が來た女史に泣いて病狀を訴へ、治療を乞ふた。女史は何分にも患者が多くて暇がないので、直ぐは治療を許し難かつたが、老女

が泣いて坐を去らぬので、行つて治療を施したところ、一回で容易に流動物を攝取し得るやうになり言語も明晰になり、八日目には自ら通つて來るやうになつたとの事である。一寸皮肉な氣がする。

京都上京區下加茂西林町の伊東津二といふ中學生が、チブスで病院へ入院し四十三日目に至つて危篤に陷入つた。そこで女史が聘せられて行つたところ、發熱四十度で腦症が起り身體は黑色を呈して痩せミイラの如き有樣である。而して冬期と云ふに患者の足は、ベットの鐵の手摺に觸れており、その手摺が足の中にめり込むと云ふ有樣で、病院はこのやうな臥寢の樣子も氣が附かず、この鐵からの冷却のために病勢が大に惡化したのであり、土屋女史はこの如き憐れな患者を見た事がなかつたと云つて居られる。女史は涙を流して病院の無責任を悲しみつつ、治療を施すこと半日にして、熱が大にさがり、下痢も止つて退院して自宅療養し、一ケ月で全快したとの事である。

京都下加茂の尾崎辯護士の夫人が、便痛が二十日以上も止り、兄弟が醫者であるところから、博士や大家の手を盡し、下劑や灌腸をなすが全く無効であつて、死期を待つの外はなかつた。然るに女史が治療を加へて六時間の間、しきりなしに腹部を按摩した結果、便が始めて通じて、一週間で全快したとの事である。

東京瓦斯會の社大澤直重氏の子供が肺炎で危篤に陥入り、熱が下らず酸素吸入の外に道なしとせる時、女史は一回の按摩によつて熱をさげ、三週間で全快せしめた。また朝鮮の釜山の那須なほ子氏は中風で十二年間も動けずに病床にあつたが、一日にして床に坐して禮をのべ得る程にし、女史の乳母の八十二歳になるのが、病氣で言語が不用になつたのを、一週間で治して起たしめ、今なほ九十歳で健全であらしめてゐると云ふ事である。

島本女史もまた、上記の土屋女史に劣らぬ手腕があり、諸家の難症を治して

居られるが、本書の締切りまでに治療例を得ることが出來ず、玆に紹介し得なかつたのは、女史のために氣毒にたへぬが『島本會』なるものによつて、屢々感謝會が開かれて居るのを見ても、その手腕の程がうかがはれる。大町桂月氏の發狂の如きも、氏によつて一時治療し得たのであつたが、酒を全廢できなかつた爲め、自ら死期を早めてしまつた。島本女史は、酒と煙草と房事を封じる事が出來て、且つ皷膜さへ完全ならば啞も癒り、吃音も癒ゆると云つて居られる。女史に云はすれば、皷膜の完全なる啞は聲帶の痲痺で、吃音は常帶の痙攣であると云ふのである。この說は土屋女史も同樣であつて、土屋女史は亂視や色盲も治し得ると云つて居られる。尿毒症の如きものが兒戲的疾病たるは論のない處である。

如何に按摩法が、眞鍋教授の物療などに比較して優等なものか、これによつても考察する事が出來る。傳へ聞くに眞鍋教授の夫人は久しく肋膜炎にて惱め

るとの事であるが、愛妻の疾病を治療し得ないやうでは困つたものではいかつ

これ等の二女史の壓動療法は、その効果に於て、餘程に澤田健氏の鍼灸法に接近してゐるが、その結果を比較すれば、女史等の方法は、熱くない點や習得の容易な點に於て灸より優つてゐる。然しその急救的速度や、小時間中に多數に施術する事に於て、全く足もとにも及び得ない。且つ壓動法は餘りに人力の看護が過勞である。よつて之は灸のきらひな病人にのみ利用すべく、且つ病院の物理科の附屬たるべきもので、普遍化し得るやうで普遍化し得ない欠點がある。ただ予は之等の偉大の治例を紹介する事によつて、結果より推して按摩法が輕蔑すべきものでないと云ふ事を、一般に知らしめれば良いと思ふ。按摩の如きと輕蔑する人は、結果より物を判斷せず、重々しき病院の設備にのみ眩惑する事を名譽と心得てゐる人に外ならぬ。道は近きにあるのであり、遠くに求めるに及ばない。

四　東洋醫學より見たる病因

以上述べし如く、鍼灸摩の三法が、何等の藥物の力を借らずに、良くヂフテリヤ、天然痘、丹毒、癰疔やチブス、赤痢等の細菌に起因する重患を救ふ事は、殺菌藥を投じて病原を掃蕩せんとする、洋方の藥物治療の理論を根本的に破壞するものでなくて何であらうか。——殆んど病菌に歸する洋方醫學は、餘りに內的原因を無視したものである。

灸によつて丹毒やヂフテリヤが、卽時に掌をかへす如く快治するは、灸の刺戟によつて、點灸と同時に白血球や抗毒素を增加せしむるのであらうか。——その如き事は全く考へられぬ事である。ここに於て疾病の病菌說は、病菌の存在を顯微鏡下に見つつ、然もなほ否定したくなるのである。

思ふに鍼灸は、經絡の鬱血、硬化——卽ち血管や淋巴管や神經が鬱血や筋肉

の痙急やその他の原因によつて、その機能を完全に動かし得ざるを、即座に疏流して正體に歸せしむるにある以上、古き說たる氣血が順を失する時に疾病を惹起せしむるものなりといふ、舊醫說はむしろ眞理に近いのではあるまいか。後藤艮山は、百病を一氣の留滯に因ることの說をなし、これ等を主として恬熙遊惰の致すところとなしたるは、頗る當を得たる譯である。——身體が健全で血行さへ完全ならば、疾病にかかるものでないと云ふ說は眞理であつて、鍼灸摩によつて頓死の病者が、病床より立ちあがるのを見れば、人間がなかなに死する者に非ずして、むしろその健壯なるに驚くの外なきものである。——かるが故に『十四經』には、人間の疾病を說かずして、單に身體の變動のみを說いてあるが、病を單に身體の變動なりとなす考は、實に畏服して舌を卷くの外なき、萬古を貫く大眞理である。

疾病は血氣の調和が完全に行はれさへすれば、決して之に罹る憂ひのないものである以上、衣食住が完全に合理的に營まてゐさへすれば、疾病が乘ずる機會がないのであつて、日本人が今日かくの如き病弱なる體質に墮落せるは、主として食物衞生が、フォイト式の肉食主義に傾むいたのと、灸をするる良習慣を失ふた結果であつて、西洋中毒の刑罰に外ならぬのである。——つまり食物が調和を失して、不適の物となりしめたに起りしに外ならぬ。

食物衞生の不完全は、身體をして一種の營養不良狀態に陷らしめ、氣血の疏流の停滯は、細胞は抵抗力を失はしめて衰弱を來すのである。——この機に乘じて侵入し來れるものが即ち病菌である。故に病菌は疾病の直接原因でなく、第二次的原因であらねばならぬ。病は自ら招くものなりとの古言は味ふべきである。予は萬病を食物の不調和より來る、纖發的のものなりと、斷言してはばからず、食物衞生と灸點の普及をば國民衞生の最上級におくものである。——いづれ食物衞生の事に關しては『日本に適した衣食住』なる著書を續刊する豫定

であるかいら、御讀みをお願ひして置く。

更にまた飜つて、漢方の藥物治療の方面を見るに、その診斷は主として腹症によつて、瘀血と云ふて身體の或部位の新陳代謝や老廢物が器官中に殘留してゐる部分を見て、之を驅逐する藥物を投ずるものであり、チブス、赤痢、等に對しても、決して殺菌的な藥を投せぬ事になつてゐる處より見れば、漢方の藥物は鍼灸摩の物理的作用を、徐々に與ふるものなりと云ふ事が出來るのであり、此點より見ても、疾病が氣血の溜滯より來ることを主張し得るのである。——予は洋方醫が注射だとか、殺菌だとか云ふて、全く身體の自然療能を眼中に置かぬが如き態度は、治療の外道なりと斷言して差支がないのである。

また鍼灸によつて、子宮の脱重や前後屈や左右屈が卽座に治療され、色盲や近眼や亂視が治療し得るに至つては、今日の生理學を根本的に破壞するものではないか。——卽ちこれ等の理由を主として遺傳や生理的畸形に歸せる總說は、全くその根據を破壞せらねばならぬ。——而してまたこの鍼灸は遺傳等の法則、特に獲得性が遺傳するや否やの多年の懸案に、最後の審判權を與へるものである。

而して現に鍼灸が、これ等の生理的畸形や遺傳物を自由に左右變化せしむるものである以上、それ等の原因をば、身體の痙攣に起因すると稱する、澤田氏の說の眞理として聞くの外はないではないか。

鍼灸はまことに刀を用ひざる神の如き整形手術である。かかる偉大な物を知らずして、洋方の外科手術を讃美するものは、まさに井底の蛙が大海を知らぬものではないか。

東洋醫學は慢性病によろしく、西洋醫學は救急法によろしとの、最近の漢方を生嚙りせし洋醫の言は、全く漢方の救急法の偉大を知らぬものである。救急

法に於ても、洋方は漢方の足下にだに及び得ぬものである。細菌學の部門が日本に輸入されて、それが日本古醫道に與へし、功績はドレ程であつたらうか。——予はあえてそれ等が臨床醫學に與へし効果は、皆無であつたと斷言するをはばからぬ。それは單に公衆衞生の方面にのみ功獻したに過ぎぬ。——勿論この公衆衞生に對する貢獻は十分に偉大であつて、その業績に對しては、予も聲を大にして賛成をなさんと欲するものである。よつて予は思ふに、今後東西の兩醫道が握手融合する事あらば、公衆衞生は洋方醫學によつてなされ、臨床醫學は漢方によつてなさるべきものなりと豫言してはばからぬのである。

漢方醫學の全般にわたる概念は、以上の記述によつてほぼ會得され、且つ東洋の醫學と西洋の醫學とが、如何に根本的にその形式と內容を異にするかといふ事が理解されたであらうが、終りに臨んでこの東西醫學の相違の基本的中心

を、更に明確に理解して置く必要がある。

西洋の醫學は科學てふ名の下に、分解だとか分析だとか云ふ方面にのみ發達し、何時しか醫學の限界を脫出して、動物學の圈內に陷沒してしまひ、醫道の權威は全く地に墮ちてしまつた。——かく醫學が醫學でなくなつた主たる原因を大觀するに、科學の本質をば分析や分解にあるとした誤謬がそれであらう。そもそも分析や分解なるものは、本來の目的から云へば、なるほど眞理を得んがための手段に外ならなかつた。然しこの分析や分解のみでは、果して眞理の本體が摑めるであらうか。いはんや手段や方法を重んずるの餘り、分析や分解がいよいよ細部に涉るに及んでは尙ほの事である。

凡そ物には分解や分析によつて眞理を摑める物と、摑めぬものとがある。物理や化學の如き非生命力を取扱ふものは前者に屬し、醫學の如き生命力を取扱ふものは後者に屬するのである。人體は有機體であつて、車やシリンダーやピ

ストンやボイラー等でなり立つてゐる汽罐車の如きものでないから、決して分析や解剖によつては、生命力の本體が會得されぬのである。それは分解や分析の出來ぬ一個不可分の單位體である。故にこれを取扱ふ醫學は、綜合といふ事を離れて存在すべきでなく、之を離れては決して眞理に到達し得ないのである。

思ふに事物を分析的に觀察するのは西洋人の癖とあり、綜合的に考察するは東洋人の癖である。つまりこの性癖は民族性に起因する東西兩民族の基本的な差異を形成してゐる。——かくて此性癖の分るるところ、自ら學術に對する民族的な得意と不得意を生ぜぬ譯にはゆかぬ。卽ち分析や分解が良くその特長を發揮し得る分野たる物理化學の方面こそは、西洋人の性癖に最も適したるところであり、綜合的研究を主として必要とする醫學こそ、東洋人の最も得意とする舞臺ではあるまいか。

ここに於てか予等は宣告せねばならぬ——分解や分析のみが科學でなく、綜

合もまた科學であるといふ事を。而して醫學の如きに於ては、綜合的態度こそは、むしろ科學的方法であると。漢方は復活して救世の具とならねばならぬ。

參考書目

（素問、靈樞、傷寒論、本草綱目等の古典の著者名を掲ぐる事、及び外國書は之を除く）

富士川游　「日本醫學史」、「皇國醫事年表」
河内全節　「日本醫史」、「本邦鍼醫史料」
岡崎桂一郎　「日本外科史」
佐藤三吉　「外科史」
青山胤通　「内科史」
原　榮　「自然療法」
吳　秀三　「シーボルド先生」
大槻修二　「日本洋學沿革考」
淺田宗伯　「橘窓書影」、「醫學典刑」、「皇國名醫傳」、「先哲醫話」
原　南陽　「傷寒論夜話」、「養桂偶記」、「經穴彙解」
原　元麟　「傷寒論圖說」
吉益東洞　「東洞全集」、古方便覽

永田德本　「知足齋永田先生遺稿」（小松靜刀編）
多紀樂窓　「救急選方」
木村博昭　「醫世異論」、「續醫世異論」
和田啓十郎　「醫界之鐵椎」
野津猛男　「漢法醫典」
湯本求眞　「應用漢方醫學解說」
鵜飼禮堂　「醫界之大疑問」、「和漢藥治要解」
加藤玄伯　「慢性病治療と漢方醫學」
田中香涯　「動物試驗價値如何」（日本醫事週報第九三四號）
岸本雄二　「人壽百歲論」、「家畜自家中毒病概論」
本居宣長　「古事記傳」
寺島良安　「和漢三才圖會」
三谷公器　「解體發蒙」
滑　伯仁　「十四經絡發揮」
石坂宗哲　「知要一言」、「竿齋叢書」、「鍼灸廣狹神悞集」
松元四郎平　「鍼灸孔穴類聚」

參考書目

富永　勇　「灸療と長生法」
朝比奈泰彦　第七回醫學總會講演筆記
文明協會編　「日本之科學界」
東京天文臺　「理科年表」
其他、澤田健「鍼灸論草稿」、城一格、加藤玄伯、奥田謙藏よりの治例報告、和田三郎「神醫島本來子」草稿、土屋松乃「理學的救命瓶療法の栞」等。

附錄論文（1）

科學上の才能は日本人が世界一

報知新聞（自大正十五年七月）

一、證明の態度

予は日本人の科學上の才能は、これを世界中のドノ民族と比較して見ても、決して劣つて居らず、むしろまさにその第一位を占むべき優秀なものであると信じてゐる。

以下その理由を述べんとするのであるが、秘かに思ふに、西洋の事情を十分に知らざるがために、今なほ西洋人をば非常に偉いかの如く思ひなしてゐる人や、西洋を崇拜する事を以て、新思想の如く誤解してゐる人達は、またもや時代錯誤の國粹的な意見、頑迷な祖國偏愛の感情論が、飛び出して來たと考へるであらう。

しかしひるがへつて考へて見るに、日本人の優秀を主張せんとする意見が、頭からそのやうな誤解を受けるのも、實はあながちに無理とはいへぬ事情があるのである。